
寄世蛾記 99

2000年12月12日



埼玉昆虫談話会

表紙の昆虫

溪流の岩肌を走るツヤチビホソアリモドキ

とても日当たりの良い岩の表面を、黒くて小さい甲虫が歩きまわっています。良く見ると小さなくぼみにたくさんいるのがわかります。溪流の大きな岩には必ずと言って良いほど、この小さな甲虫が見られます。ツヤチビホソアリモドキは埼玉県では嵐山溪谷ではじめて記録されましたが、その後の調べで日高市や都幾川村、小川町、両神村、大滝村などでたくさん見つかり、県内では普通種であることがわかりました。岩の表面という特異な環境に生息するため、目にとまる機会が無かったのでしょうか。

イラスト・文：豊田浩二

与那国島・蝶採集(しない?) 日記

(2000年10月3日～6日)

小野寺 博昭

10月3日(火) 雨のち晴れ

羽田 那覇

✈ JAS 557便 13.55→16.25

📍 那覇東急ホテル

今日は桶川発11時07分発の電車に乗車というゆっくりスタートで沖縄に向けて出発。上野・浜松町を經由してモノレール羽田空港駅には12時42分に着いた。今回の最終目的地は与那国島だが、この島に家族で同行したことがあるのは息子の貴弦(たかふさ)だけなので、妻にとっては初めての与那国島である。

そもそも今回の旅行を思い立ったのはJASマイレージ・サービスのマイル数が夫婦共20,000マイルを超え、東京・那覇間の無料往復搭乗券がもらえる権利がついたからであるが、この権利はゴールデン・ウィーク、盆休み、年末年始といったトップ・シーズンには行使出来ない仕組みになっているので、期初の管理部門への提出書類が多く、気ぜわしい時期だが、休暇をやりくりして何とか4連休にして運が良ければ未採集の迷マダラに巡り会える可能性のある与那国島に決めたワケである。

本来ならJALと並んで東京・那覇便が一日7往復あるANAのマイレージ・サービスを使いたいところだが、ANAの方は昨秋対馬ヘキリシマドリシジミの採卵に行った時に使ってしまったので15,000マイルしか貯まっておらず、福岡或いは札幌までしか届かない。JASの方は東京・那覇間是一日3往復しかなく、時間帯の良い便はないがやむを得ない。

JASの受付カウンターへ行って「運賃0」との記載がある那覇までの無料往復搭乗券を発行してもらい、昼食を済ませてから、JAS 557便、定刻13時55分発那覇行き(これがJASの那覇行き最終便なのだ)に搭乗。修学旅行の高校生が沢山乗っており、満席である。搭乗機(A300R, JA8292)は14時05分にランプ・アウト、14時17分にテイク・オフ。2時間14分の飛行時間で16時31分に夏の陽射しが降り注ぐ那覇空港にランディング。那覇東急ホテルに向かう。タクシーの運転手さんの話では、創業38年になるこのホテルも業績不振で、11月末日で幕引きになるのだそうだ。

ホテルにチェックインして早速公設市場に繰り出す。生きたイセエビや、セミエビという(命名者は「良くぞ名付けた!」といった感じの)雰囲気ガセミに良く似ているエビやハリセンボンを見た後、妻の希望でパッション・フルーツを買い求める。以前西表島仲間川林道で野生のこの果物を口にして以来、すっかり気に入ったようだ。

この5月に新田 智氏と入ったステーキ・ハウス“マウイ”でステーキとイセエビの夕食。若い女性達のグループが陣取っている奥のテーブルでは、コショウの缶を両手に持ち、素早く何度も交互に入れ替えて肉に振り掛け、最後には缶を抛り上げて後ろ手でキャッチするコックのパフォーマンスに歓声が上がっている。こちらのコックも我々夫婦のためにやって見せてくれた。ホテルに戻り、テレビでダイエー対西武の野球中継を観戦。西武の松坂大輔投手が延長10回を投げて踏ん張り、2対1で西武が勝った。

10月4日(水) 晴れ(那覇は雨)

那覇 石垣 与那国

✈ ANK 431便 8.00 → 8.55

✈ JTA 961便 10.05 → 10.35

📍 旅館「入福」

午前7時に那覇東急ホテルをチェック・アウト。タクシーに乗り込み、15分ほどで那覇空港に到着。ホテルで手渡された朝食代わりにサンドウィッチをパクついてからANK 461便、定刻8時

00分発石垣行き(B737-200, JA8500)に搭乗。搭乗機は8時00分にランプアウト。8時11分にイク・オフ。機内では持参した最近発行されたばかりの航空小説“最後の人質(上)”(ジョン・J・ナンス;新潮文庫)を読み始める。中々面白い。43分の飛行の後、8時54分に石垣空港にランディング。那覇は雨だったが、404kmほど南西の石垣島はまずまずの天気だ。

次いでJTA 961便、定刻10時05分発与那国行き(B737-200, JA)に乗り継ぐ。10時03分にランプアウト。22滑走路を10時07分に離陸し、飛行時間18分ほどで10時25分に与那国空港に着陸。空港には与那国ホンダの西條 実氏が来ており、早速最近の蝶動向を聞いたが、台風は8月に集中してしまったせいかな迷蝶はあまり期待出来ないようだ。西條氏が空港に置いてくれた車を借りて、まずは宿に向かう。荷物を置いて採集用具を車に積み、早速宇良部岳へ繰り出す。鞍部をゆっくり流しながら登っていったが、カラスアゲハ、スジグロカバマダラ、リュウキュウアサギマダラ、イシガケチョウ、アカタテハ等が散見された程度で、めぼしい蝶は翔んでいない。5月にホリシャルリジミをもたらせてくれた頂上でもメスアカムラサキの♂とシロミスジを見掛けただけ…。シロミスジはこの島の特産(最近では西表島でも採れるが、数はずっと少ない)だし、新鮮な個体だったのでネットに入れる。途中で追い抜いて来た自転車漕いでいた元気の良い青年が、汗ぐっしょりになって頂上まで登って来た。中々の脚力である。

次いで比川水源を覗いてみる。かつては何度か良い思いをさせてもらったポイントだが、大したもの翔んでいない。ヒメイチモンジセセリとクロボシセセリ各1頭のみを採集して、久部良方面に転戦したが暑いだけでネットするほどの蝶にはお目に掛からず、昼食にする。昼食後、与那国島は初めての妻が同行しているので西崎(いりざき)に回り、“日本国最西端の地”の石碑の所で記念撮影。からっと晴れており、東崎(あがりざき)では西表島が見えたので、ここ西崎からは「或いは台湾が望めるか」と思ったのだが、残念ながら見られなかった。展望台に居合わせた人の話では、台湾まで僅か110kmなのだが、滅多に見られないらしい。天城高原からの富士山と同じようなものなのだろう。新川線を経て比川林道に入ってみる。とろとろと走っていると、16時05分に助手席の妻が「アオスジアゲハみたいだけど緑っぽく見える」と言う。そりゃコモンタイマイに相違あるまい。すぐ車を停め(自動車は滅多に通らないので適当に駐車しても大丈夫)、ネットを引っ掴んで花付きに走る。センダングサに吸蜜に来たこの蝶をネット・イン。後翅に少し欠けがあるが、紛れもなくコモンタイマイの♀だった。もう1頭目撃したのだが、アツと言う間に木立の上を翔び去った。コモンタイマイは1995年12月に採集しているので自己採集種数は増えない。

再度宇良部岳鞍部を覗いてみたが、大したものは見られず、宿に引き上げた。

夕食後、西條氏宅を訪問。暫らくすると、この7日から来島するという東京の高橋 直氏から電話が掛かって来たので途中で替わる。先日ガランピマダラを採集した高橋氏は三石(みついし;現地人は「ミミシー」と発音する)が良いと言う。明日にでも覗いてみよう。又、高橋氏が「『蝶日記1999』を暫く電車の中で読ませて戴きました。分量が多いので読むのが大変でした」と言うので自分は「入力する方も結構大変なんだよ」と言っておいた。迷蝶狙いの高橋氏のことだ。この土曜日から訪れて又何か迷蝶をゲットするのだろう。結婚した新田 智氏と米谷敦子氏の話になったり、蝶の話に戻ったりしていたが、西條氏のウスコモンマダラの標本をもう一度じっくり見せてもらって、22時半頃に西條邸を辞去。

<今日の採集種>

- (1) 沖縄県八重山郡与那国町〔与那国島〕宇良部岳
 - ・シロミスジ 1♂
- (2) 沖縄県八重山郡与那国町〔与那国島〕比川水源
 - ・ヒメイチモンジセセリ 1♂
 - ・クロボシセセリ 1♀
- (3) 沖縄県八重山郡与那国町〔与那国島〕比川林道
 - ・コモンタイマイ 1♀

10月5日(木) 晴れ

今日一日だけは24時間与那国島にいられる日である。宇良部岳を覗いてから比川水源・比川林

道・久部良を回る。比川水源ではゆったりとオオゴマダラが翔んでいる。いつ見ても南国に来た気分を味わわせてくれる蝶だ。久部良でリュウキュウムラサキ1♂を採集してから空港で昼食を取り、三石に行ってみる。タテハモドキ、スジグロカバマダラ、リュウキュウアサギマダラ、メスアカムラサキ等の普通種しか翔んでいない。西崎に回る。「日本最西端のシルビアシジミだから」ということで、シルビアシジミ3♂♂のみをネットに入れる。キツネノマゴは見当たらないが、アオタテハモドキの♀が翔んでおり、時々産卵行動をしているかのように見えるのだが、卵は産付されていなかった。その後、東崎に行ったが、昨日より更にくっきりと西表島が見えた。

再び三石へ行き、カバマダラの交尾個体を目撃。交尾飛翔形式は♂+♀だった。凶鑑類を見ると、どの種類も同じくらい個体数があるかのように錯覚するが、スジグロカバマダラと異なって、少なくとも八重山諸島ではカバマダラはそんなに個体数が多いものではない。〔写真1〕

又々宇良部岳に寄ってみる。ここでは妻がトンボを見つけたので、斉藤洋一氏用に2頭採集し、三角紙に入れる（後にヒメトンボ1♂1♀と分かる）。

日本で一番最後に日が沈む所の太陽が海に没するさまを見ようと、西崎に行ってみたが、水平線上に雲があり、その様子は見られなかった。

<今日の採集種>

- (1) 沖縄県八重山郡与那国町〔与那国島〕久部良
 - ・リュウキュウムラサキ 1♂
- (2) 沖縄県八重山郡与那国町〔与那国島〕西崎
 - ・シルビアシジミ 3♂♂
- (3) 沖縄県八重山郡与那国町〔与那国島〕三石
 - ・カバマダラ 1♂1♀

10月6日(金) 晴れ

	与那国	石垣	那覇	羽田
↑ RAC 806便	14.00	→14.30		
↑ ANK 438便		17.15	→18.05	
↑ JAS 556便			19.50	→ 22.10

束の間の与那国島滞在も今日で終り。午後には帰途に就かねばならない。朝食後、宿で精算を済ませる。一人一泊6,500円の計算である。早速、宇良部岳鞍部に向かう。触角がとても長く、黄色い点状の斑紋があるカミキリを妻が見つけたので小堀文彦氏へのお土産用に採集。更に別種のカミキリを捕まえたが、昨日採集したものと同種のような気がしたので比較してみようと思い、フィルム・ケースを取り出してみると、蓋には見事に穴が開けられており、空っぽ！ 噛み切って脱出したのだ。

次いで比川水源に行き、ここはバッタやキリギリス類が比較的目に付いていたので、バッ君（新田智氏が以前送ってくれた我が家のオキナワキノボリトカゲ）のお土産用に7匹ほど採集してポリ袋に入れる。クロテンシロチョウ1♀のみをネット。

これまでの状況からすると、とても迷蝶に遭遇しそうな気がしなかったので、島内をドライブすることにした。これまで何度も与那国島を訪れているのに、蝶に関してはあまり期待出来ない立神岩やサンニヌ台といった景勝の地には来たことがない。今回は与那国島は初めての妻が同行したお陰で覗いてみる気になった。

13時前には与那国ホンダに戻って車を返し、西條氏に別れを告げて、少し早いが空港に向かう。与那国・石垣間は、YS11の時代からずっと1日2往復飛んでいたのだが、昨年7月より1日1往復に減便され、不便になっていた。そこで琉球エアコミューターが島民の期待に応える形で午後の便を試行的に飛ばすようになったようだが、噂では思ったほどの搭乗率が得られず、航空会社は手を引きたがっているらしい。蝶屋にとっては、最終日も午前中は採集に充てられるようになった実にありがたい便なのだが…。

空港でコーヒーを喫してから琉球エアコミューターのRAC 806便、定刻14時00分発石垣行き

(DHC-8, JA8974)に搭乗。双発プロペラ, 39人乗りのこの機種に乗るのは初めてなのでワクワクする。高翼単葉なので極端に脚が長い。

乗客20人を乗せたDHC-8は14時02分に駐機場を離れ、08滑走路から14時06分に離陸。エンジンの音もYS-11ほどの力強さはなく、何となく心もとない。機体が小さいので、積乱雲があると大型機のように真っ直ぐ突っ込むことはせず、それを避けて迂回して飛ぶ。

高度2,100mを時速460kmで暫く飛び、石垣空港が近づき着陸体勢に入ると、機械的と言うよりは重力を利用する感じでズボッとその長い脚を出し、飛行時間22分ほどで14時28分に石垣空港に着陸。

リュック二つは既に最終目的地の東京まで預けてあるので身軽だし、次に乗るANK 438便那覇行きは17時15分発なので、一旦タクシーで石垣市内に向かう。子供達のお土産にドラゴン・フルーツ、パッション・フルーツ、シークワサー・ジュース、グアバ・ジュース等を買って求め、コーヒーを喫してから石垣空港に戻る。

エアー・ニッポンの待合室で椅子に座り、煙草をふかしていたのだが、窓外に何気なく目をやると、道路の向こう側のタガヤサンの並木にウスキシロチョウが4,5頭まつわっているのが目に入った。気になったので妻に「ちょっと様子を見て来る」と言い残して道路を横断する。金属製のポールに何と蛹が付いている！ この時期でも八重山諸島は最高気温は30℃前後、最低気温も23,4℃あり、本土で言えば夏の陽気である。「何もこんな所を選んで蛹化しなくても良さそうなものなのに…。さぞかし熱かったろう」と思いつつ丁寧に糸を剥がす。次いでタガヤサンの葉をチェックしていくと、次々と蛹が見つかる。結局32頭の蛹を採集したが、色彩は褐色蛹1頭(3.1%), 白色のもの3頭(9.4%), あとの28頭は緑色蛹(87.5%)で、圧倒的に緑色蛹が多かった。又、蛹化場所については前述の金属製ポールで蛹化していたもの1頭(3.1%), 食樹のタガヤサンの葉表で蛹化していたものは褐色蛹の1頭だけ(3.1%)で、あとの30頭は全てタガヤサンの葉裏で蛹化していた(93.8%)。

ほくほくしながらANK 438便, 定刻17時15分発那覇行き(B737, JA8504)に搭乗。満席の438便は17時18分にランプアウト、17時22分にテイク・オフ。飛行時間41分で18時03分に那覇空港にランディング。

空港内で夕食を済ませ、携帯用展翅箱とウスキシロチョウの蛹が入ったポリ袋を手を提げて、JAS 556便, 定刻19時50分発東京行き(A300B4, JA8237)に搭乗。搭乗機は19時53分にランプアウト。20時05分に夜の滑走路を離陸。高度9000mを920km/Hで航行し、22時18分に羽田空港に着陸(飛行時間2時間13分)。

浜松町を經由し、京浜東北線で大宮駅まで行って、タクシーを拾い、午前0時半を回ってから我が家に帰り着いた。例年なら迷蝶を狙うには良い時期の筈なのに、今年は9月以降はちっとも台風が来ておらず、「採集しない日記」になってしまったが、何度来ても八重山は気持ちが安らぐところだ。

<今日の採集種>

(1) 沖縄県八重山郡与那国町〔与那国島〕比川水源

・クロテンシロチョウ 1♀

(2) 沖縄県石垣市〔石垣島〕石垣空港

・ウスキシロチョウ(蛹) 32頭

※ 持ち帰ったウスキシロチョウの蛹は、その後10月7日から14日までに14♂♂15♀♀の29頭が羽化した(銀紋型4頭, 無紋型25頭)が、最後の3頭の蛹は14日の夜には翅が透けて見え、羽化前兆となって、翌15日には揃って羽化するだろうと思われたにも拘わらず、羽化に至らず死亡した。原因は、それまでは10月とは思えないほど気温が高かったが、15日から関東一円は打って変わって、最高気温が一気に4℃前後下がったためだと思われる。ウスキシロチョウが羽化するためには24~25℃の最高気温が必要らしい。平年であつたら29頭も羽化しなかったであろう。

以上

生きものの美しさ、数の多さ*

牧林 功

本物の自然の美しさに触れる

私は少年時代を伊豆の伊東で過ごしました。温泉場として名高いところですが、海と山と川のある町です。私の家の背に棚田が美しく広がっていました。

少年時代の夏は生きものと100%触れ合う生活でした。海に入るといっても、今日のいわゆる海水浴でなく磯の素もぐりでした。豊かな海の中にはワカメやホンダワラが波にゆれ、テングサが海の底の岩に付着していました。そういう中を華やかなベラがおよいでいましたし、岩陰にはウツボが潜んでいました。そういう海底にめがね一つで潜るのです。海の底には小さな生きものですが、アオミウシやシロミウシがいます。なんとも美しい色合いをしていて、岩の上を少しずつ動いているのです。海中の花ともいえるケヤリムシは、触ると開いていた花をサッと引き込ませるので、これが植物でなく動物であることを知ることです。海の中は竜宮城さながらの極彩色の世界でした。

浜遊びをしないときは裏の棚田でギンヤンマの採集です。ライオンが百獣の王と呼ぶのにふさわしいのなら、ギンヤンマはトンボの中の王様です。堂々とした大きさ、均整のとれた姿態、数枚の田んぼを一匹の♂がお回りします。言わずと知れた縄張り行動です。それをどうやって捕らえるか。トンボと子供との知恵くらべです。

皆さん！トンボをつかまえたことがありますか？ギンヤンマというトンボは目（複眼）がとても大きく、額と口の部分を除いて頭の殆どが目です。つまりよく見える目をもっているのです。近づくのと遠ざかります。子供と一定の距離を保ちつつ、田んぼの上を行ったり来たりするのです。少年が網をもっていると、その竿の僅かに届かないところできりときびすを返します。

苦勞して捕らえたときの手応え、さすがに大型ですから「捕った！」という感じになります。手で胸をはさむと、筋肉の震えがぶるぶると伝わってきます。頭、胸がグリーンで、尻尾が漆黒です。その境目に空色の腹巻をまいています。ギンヤンマは夏の緑と青空の色です。それに目の輝きが素晴らしく魅惑的です。どんな宝石も負けるほど、深く緑色に輝いて、しかも澄んでいます。

少年時代、もう一つ脳裏に焼きついていることがあります。それは春の遠足で出会ったオキナグサです。遠足にどこへ行ったかよく覚えていないのですが、なだらかな草原の山にいました。恐らく草刈場だったところではないかと思うのですが、そこにオキナグサが咲いていました。花卉が真紅で植物全体が長い白い毛に覆われ、この世のものとも思えないお伽の国の植物のように思えたのでした。私はこの花の美しさに感動しました。

翌年の春の遠足でもオキナグサに出会いました。遠足の行き先は違ったのですが、オキナグサは咲いていたのです。つまり当時は日当たりのよい草地に広く分布していたのだと思います。今度は家にもって帰ることにしました。ショベルも何も持っていないので、手で土を掘り、オキナグサを掘り出したのです。それをリュックサックの中に入れて持ち帰り庭に植えたのですが、結局根づきませんでした。しかし持ち帰りたいたいという衝動を受けたほど魅力的な美しい花なのです。

オキナグサはキンポウゲ科の植物で、今、私は年に何回も山を歩いています。終ぞ出会いません。あんなに沢山生えていたのに、まったく見当たらないのです。

幼い時に本当の自然の美しさに触れることが、とても大切だと思います。私が現在あるのも、少年時代に奇妙な形をしたものや、色とりどりの美しさをもった、様々な生きものに会ったからに他ならないとおもうのです。

今、自然公園というような名で、擬似自然を提供しているところがふえました。そのためそれが自然かなと錯覚を抱かせます。しかし整備された公園は自然そのものではありません。本当の自然は野性の中に存在します。そこではある時は美しく、ある時は猛々しく、決してやさしさだけではありません。

しかし美しいものは本当に美しくその中に存在します。カワセミやオオルリの生きているときの羽の美しさ、海中を泳ぐソラスズメダイやチョウチョウウオのなまめかしいほどの美しさ、宝石のように輝くトンボの目、オキナグサやシラネアオイの神秘的な美しさ、すべての生きものが生命を

*嵐山町“生きものシンポジウム”基調講演

輝かせています。ひとたびその美しさに触れた者は、一生その美しさに魅かれ続けます。美しさに触れるのは、感性が豊かな幼い時であれば申し分ありません。美しいと感じると気になるものです。そしてもっとよく見てみようという気になります。どんな格好をしているのだろう。どんなところで生きているのだろう。興味が膨れていきます。気になることが、良い結果を生んでいくのです。

豊かな自然は生命がいっぱい

土手や草原に、春になるとカラスノエンドウというマメ科の草がピンクの花をつけます。この果実を摘みとり細工をして、笛をつくり鳴らした経験は、多くの人々が持っているでしょう。

このカラスノエンドウという植物の新しい茎にエンドウヒゲナガアブラムシとマメアブラムシが集ります。この2種のアブラムシを食いにナナホシテントウとテントウムシがやってきます。カラスノエンドウは葉柄のつけねに黒い蜜腺があり、蜜を出します。その蜜をなめに、クロヤマアリ、クロオオアリ、ホソハリカメムシ、ミツバチがやってきます。花が咲きますと、ミツバチとベニシジミとツバメシジミが吸蜜に訪れます。

土手に生育するカラスノエンドウには、このように沢山の虫が集まり、虫たちはその恩恵で生きています。昔から日本に生育している植物だと、このように沢山の虫たちを抱えています。そしてこれらの虫たちを小鳥たちが餌にします。一羽のシジュウカラが子育てのあいだ、つまり1ヶ月半ほどの間に1500匹もの虫を食べるといわれています。こうして食うものと食われるものの関係が出来上がっています。

しかし外来の植物では、こうはまいません。例えばブタクサ、オオブタクサという植物が戦後日本に侵入しました。それを食う虫がいなかったこともあって、あっという間に日本国中に拡がりました。それが花粉を撒き散らすので、花粉病にわずらった方もいるかも知れません。しかし数年前、この草を食うブタクサハムシという虫が日本に侵入してきました。この虫も日本に入るやいなや、またたく間に分布を広げています。ブタクサの葉が虫食いだらけになっているのは、この虫のせいです。この虫の侵入でブタクサとオオブタクサの繁茂は、いくらか押さえられるかも知れません。

またイチヨウやメタセコイアは日本では滅んだ過去の植物です。それを食っていた虫たちも絶滅したと思われる。イチヨウやメタセコイアは人間が育てることによって、生をまっとうしているのですが、これを食う虫がいなものですから、とても寂しい存在なのです。

小鳥たちがさえずる林に安らぎを覚えます。しかし小鳥が生息できるのは沢山の虫がいるからなのであって、虫のつかない植物ではいくら緑が広がっていても、小鳥は近寄らず楽しくも何ともありません。植物の種類も多く、虫の種類も多く、野鳥の種類も多いところが豊かな自然なのです。

森には沢山の生きものが住んでいます。森の中は日射や放射がさえ切れ、日中は温度が低く夜は暖かいのです。従って一日の気温較差は小さいのです。雨が降っても、雨は一旦、木々に受け止められ、じわじわと地中にしみ込むので、森はいつも適度な湿り気を保っています。

こういう特殊な気象条件を森林気象といいます。こうして乾燥や気温較差に弱い動植物の生育を助けています。オサバグサやフキバッタなどの森の生きものは、こういう特殊な森林特有の気象のために生き残ってきたのです。

森に小道があります。小道は一面に広がった森にギャップをつくりませんが、このギャップが森に変化をもたらす、多様な生きものを抱えることができます。小道でなくとも小さな広場もギャップです。このギャップが多く生きものを誘って、森の生きものの種類数を増やしています。ですから森の中のギャップの存在はとても大切です。ギャップは大風などによって木が倒れたりして自然に出来るものですが、人がつくった小道も同じです。しかしこれが幅を広げた舗装道路になりますと、様相は一変します。風の通りがよくなって乾燥するとともに、路面の照り返しと、夜の冷却で気温の日較差が大きくなり、環境の変動に弱い動植物から死んでいきます。森の中に舗装道路ができると森の生物相は著しく貧弱になるのです。

私は昆虫調査で山に入ります。森の中につけられた小道では様々な昆虫に出会えるのですが、その道が舗装道路になったとたん虫はいなくなり貧しい昆虫相になってしまいます。これはなにも日本に限った事ではありません。シベリアの林でも、インドネシアの熱帯林でもみな同じです。自然が豊かなところに舗装道路は避けるべきです。それが自然を守る第一歩です。

道路がよくなると交通量が急激に増えます。そのことで排気ガスの総排出量が増加し、大気汚染を招きます。まだ因果関係がはっきりしていないのですが、状況証拠として交通量の多い道路の風下で、木々が枯れはじめています。

日本の自然を大切にしよう

春一番というより、冬から咲いているのがオオイヌノフグリです。青い小さな花ですが、可憐な花です。好きな人も多いと思います。学名は*Veronica persica* といいます。ペロニカはゴルゴタの丘の処刑場に連れていかれるキリストに、毛布を差し出したとされる女性の名前です。ペルシカは勿論、“ペルシャの”という意味です。つまりペルシャのペロニカという名前なのです。名前も素敵です。和名のオオイヌノフグリは品性の悪い名前です。フグリはコウガンの古名で犬のコウガンを意味します。果実の形がそれらしく見えるからです。頭にオオが着いているのは、この仲間では一番大きな花を咲かせ、大きな実を稔らせるからです。

このオオイヌノフグリですが、今や日本の空き地にはどこにでも生育しています。いちおう虫媒花で、ハナアブなどの来訪によって花粉媒介します。しかし早春には、まだ虫の絶対量が不足しています。虫も寒くて活動できないのです。そこでオオイヌノフグリのとった戦略は雄動自家受粉という方法です。

オオイヌノフグリは日が当たると咲きだし、夕方日が陰ると閉じる一日だけの花です。花の中心にメシベが1本あり、オシベは2本でメシベの両側に生えています。夕方、花卉に押し込まれて、オシベの先端はメシベの先端につきます。そこで花粉が柱頭につくのです。つまり虫がいようがいまいが自家受粉できるのです。これが勢力を拡大できる最強の武器なのです。

自家受粉のよく知られた例に、セイヨウタンポポがあります。古くから日本に生育していたカントウタンポポを駆逐して繁茂しているのは、この自家受粉のためです。在来種は虫媒で、虫が花粉を媒介しないと結実しないのですが、外来種の方は勝手に結実します。それに在来種が春だけの開花なのに対して、外来種は開花数は春以外は少ないのですが、年中咲いています。それに種子が在来のものより軽いのです。同じ風に乗るのなら、より遠くへ飛べるのです。また発芽も在来のものより早いことが知られています。

セイヨウタンポポは車が通ったあとに巻き起こる自動車風に引っ張られるようにして、車のあとを追って分布を広げています。こうして日本の自然は少しずつ変化しています。ブタクサがはびこり、セイトカアワダチソウが日本の秋を彩ります。

日本の秋にコスモスも加わりました。秋の風景ということでテレビ局が何の解説もないままに、コスモスの花が風に揺れている風景を映し出します。あまりものを考えない人達には、コスモスの咲く里を日本の秋の風景だと刷り込まれてしまいます。コスモスは外来の花です。原産地はメキシコの高山です。園芸種ですから畑に植えるのはまあ許せますが、川の堤防に植えたりするのは、どうかと思います。

日本の秋にセイトカアワダチソウやコスモスの咲き乱れるのは、いかがなものでしょうか。日本の秋にはススキやワレモコウの方が似合うと思いませんか。これこそワビ、サビの世界にふさわしい筈です。

似合うといえば富士には月見草がよく似合うといった、高名な作家がいます。月見草も外来種です。本来の富士山麓になかったものです。似合うとか、似合わないは個人の主観ですから、かまわないのですが、影響力の大きな人の発言はいささか困ります。富士山にはやはりマメザクラが似合います。気品があって気高い風景です。

外来種により、在来の植生がただでさえ圧迫されているのに、人間の手でそれを助長することは、慎まなければなりません。

貴重な自然

オオタカやクマタカは絶滅のおそれのある動物です。これらはその生態系の頂点に立つ高次消費者として、生産構造や幾層にも重なった消費構造の上にあります。オオタカやクマタカの生存は、それから推算できる多量な生物の現存量を保証します。こういう生態系が存在するということは、広大な野生の領域としてとても貴重なものです。この野生の領域が狭められると、生産者や消費者の量が少なくなり、オオタカやクマタカのような高次消費者を抱えられなくなります。ですからオオタカやクマタカがいる自然はまるごと大事にしなければなりません。そこではオオタカやクマタカだけが重要なだけでなく、そこに息づいているすべての動植物がみな等しく貴重なのです。私たちはその自然がそのまま、永遠に持続できるよう策をほどこさなければなりません。ここでいう自然は量が保証された自然です。

貴重な自然は、このように量が保証されたものだけに限りません。熊谷市久下のムサシトミヨのように、とても狭い場所が大切なことがあります。ムサシトミヨの生息する元荒川とその流域はクマタカやオオタカのすむ生態系ではありません。しかしムサシトミヨは全地球上で熊谷市の元荒川

のほんの短い流れにしかすんでいません。

ムサシトミヨは熊谷市ほかに、川越市や東京の三宝寺池、井の頭池にもかつては生息していました。しかし水質の悪化等で熊谷以外ではすべて絶滅してしまいました。絶滅したのはすべて明治以降です。ずうーっと昔には、関東地方の湧き水を中心とした冷水系に、連続して生息していたのでしょうけれど、次第次第に生息場所が分断されて離れ離れになり、そして各地で消滅し熊谷だけに残ったのです。熊谷でも自然にまかせていたら絶滅し、二度と生きた姿を見ることが出来ない魚になったと思います。幸いにしてムサシトミヨの生息地の近くに県の試験場があり、冷水系のマスなどの飼育をしています。この施設では地下から冷水をポンプでくみ上げ、その排水を元荒川に流しています。このため元荒川源流近くは冷水がいつも流れていて、ムサシトミヨが絶滅せずに生き残れているのです。もし夏に長時間の停電があり、地下水を汲み上げているポンプが長い時間停まると、元荒川源流の水温は上昇し、ムサシトミヨは絶滅するかもしれません。そんな危うい存在なのです。つまりムサシトミヨはレリクトなのです。レリクトは遺存種と訳しますが、古い時代に勢力のあった生物の生き残りなのです。こういう種類の生きものもまた、とても貴重な存在です。

ムサシトミヨだけではありません。荒川の源流近くに住むトワダカワゲラや、奥秩父の石の下に生きるガロアムシなどもそうです。昆虫は一般にハネをもっていますが、トワダカワゲラやガロアムシは生まれながらにしてハネを欠いています。ハネを欠くということは移動力が少ないことを意味します。

このような貴重な生きものがいるところは、オオタカやクマタカがいなくとも貴重な自然です。これは質による貴重な自然と申せましょうか。

農薬による生きものの殺戮

寄居町では新井裕さんが頑張って「トンボ公園作り」をされています。多くの賛同者がいて末野、折原、男倉などにトンボ公園ができています。この新井さん達の運動に刺激されて、県内では他に北本、鳩ヶ谷、新座といったところでトンボ池づくりをしています。このトンボ池作りは多くの場合、休耕田を利用しています。休耕田の利用という点でとてもよいことだと思っています。

しかし、トンボ公園がいいという人の中にも、トンボはいいがカやブユは困るという人がいます。しかし、トンボは空気を吸っているだけでは生きていきません。餌も必要です。餌は生きた力だとかハエだとか、小さな虫たちです。餌になる虫たちはトンボの数より多くなければなりません。当然のこととして不快な気に入らない虫もトンボ公園で抱えなければならぬのです。生命のあるものがいろいろいて、初めてトンボも住めるのです。トンボ池を作ることは、こういう様々な虫たちを生かすことなのです。

湧き水があって、小さな流れがあり、その流れが田んぼを潤します。あるいは池や沼に流れ込んで止水域をつくり、あふれた水はまた流れを作ってやがて川に注ぎ込みます。この水域を中心に、じつに多くの生きものが生きていました。農薬をまったく使わなかった戦前の湧水と、それに続く水系はとても豊かなものでした。カワトンボ、ムカシヤンマをはじめとする各種のヤンマやトンボ、カゲロウやカワゲラ、ヘビトンボ、タガメ、コオイムシ、ナベバタムシ、ミズカマキリ、ゲンゴロウ、ガムシなどなど。こんなに沢山いた生きものが水田にDDTを散布することによって、一変にいなくなったのです。

イネの害虫という一番の大敵はニカメイガです。いわゆるイネのズイムシです。イネの茎の中に入って生活していますので、その中まで薬効の届く、強力な薬でなくてはなりません。そこで有機塩素系のDDT、有機リン系の「パラチオン」など各農家はこぞって散布しました。

昭和40年ぐらいまでは田んぼに誘蛾灯という虫寄せ装置を作って、春から秋にかけて点灯していました。ここに害虫を誘って、殺したのです。しかし昭和40年代後半には誘蛾灯の設備は取り払われてしまいました。誘蛾灯にくる害虫がいなくなったからです。何故でしょうか。DDT、BHCやパラチオンの散布によって、害虫が駆除されたからです。

虫たちは害虫も害虫でないものも区別なく生きています。害虫がいなくなったことは、すべての昆虫がいなくなったことを意味します。こうして農村周辺の昆虫たちはまったく影をひそめてしまったのです。それだけではありません。カエルやイモリやメダカなど、すべての生きものがいなくなったのです。それを食べていた水鳥も倒れていきました。こんなに効果のあった毒性の強い薬ですから、人間の方が恐ろしくなってきました。そこで使用禁止になり、今では使われなくなったのです。

しかし虫の絶対数がなかなか回復しません。神奈川の厚木市在の農家の方から聞いたのですが、カボチャは昔は放り出しても稔って収穫ができました。しかし今では人間が雌花のメシベの頭に、雄花の花粉をつけてやらないと結実しないといえます。アブやハチなどの花粉を媒介する虫が、いなくなったからです。これはとても悲しいことです

現在は少しずつ少しずつ回復しているのですが、まだ昔ほどには戻っていません。

安心ばかりしてられません。薬効の強力な農薬は回収されたと当局はいつているのですが、まだ隠しもっている農家はあるらしいのです。1 昨年から長野県下で野鳥の大量死が続いています。1 昨年1月、長野県下諏訪町でレンジャクが173羽変死しました。それを皮切りに長野県下5市3町で合わせて187羽のレンジャクが死んだのです。当局はピラカンサの実を大量にのみ込んで窒息死したのだと公表しましたが、事実は農薬によるものです。2月にムクドリが松本、岡谷で36羽、8月に駒ヶ根でカワラヒワ、スズメ、キジバトが63羽、佐久市でも11、12月にムクドリが80羽変死しました。今年に入って1月、浅科村でトビが11羽変死しました。

種類は違いますがすべては農薬によるものようです。この数字は長野県内だけの数字ですが他の府県でも、このような事実が発生しているかも知れません。

火元のわからぬ恐ろしさ

所沢のゴミ処分場のダイオキシン問題以来、ダイオキシンという言葉が日常化しました。除草剤はかつてベトナム戦争でアメリカ軍が使った枯葉剤ですが、ダイオキシンが多く含まれています。これを繰り返し使用したために国土にダイオキシン汚染が広がったのです。私達は除草という労力を惜しむことによって天につばを吐いたわけです。

これらは他の物質と共に環境ホルモンと呼ばれているもので、生殖細胞に異常を与える働きをします。魚の卵巣の発達をおさえたり、オスになるべきサザエがメス化したりということが調べられています。しかしこういう新聞沙汰になった特定の生きものだけでなく、ほかの総ての生きものに影響しているであろうことは想像に難くありません。性比異常を起こして、知らず知らずのうちに種の個体数が激減しているらしいのです。

それと酸性雨、酸性霧も問題です。私は丹沢大山の調査に加わりましたが、丹沢大山の場合、東名高速を通る車の排気ガスが南風にあおられて山頂に流れ、ブナを枯らすのではないかと疑っています。酸性雨、酸性霧は日光の白根山でも問題になっています。かつて、うっそうとしたブナ林だった場所が、立ち枯れが目立ってきて明るい疎林のような感じになっているのです。

ブナが枯れるということは、何もブナだけの話ではないと思います。良く調べられていませんが、様々な生き物に悪い影響を与えていると考えてまちがいないでしょう。最近紀伊半島一帯と山形から島根にかけての日本海側の県で、シイ、カシなど常緑広葉樹が枯れ出したそうです。

石原慎太郎さんが都知事になって、ディーゼル車の規制を打ち出し、話題を呼んでいます。大気汚染の元凶はディーゼル車の排気ガスがもっとも主要な原因です。東京都によると、走行量で2割のディーゼル車が、窒素酸化物 (NOx) の7割、黒煙などの粒子状物質のほぼすべてを排出しているといいます。この排気ガスは、喘息などの呼吸疾患や生殖異常を起すおそれがあります。ディーゼル燃料の軽油の値段が安いのは、もっぱら税金が安いからです。それは物流を担うトラック輸送を優遇してきたからで、こうした政策が大気汚染を進行させてきました。極論すれば政治が悪いのです。排気ガスを厳しく規制すれば技術開発に費用がかかります。車や燃料の税金を重くすれば商品の値段が吊り上ります。それでも環境や健康にはかえられない苦です。日本ではこの件に無頓着な人が多いのですが、大気汚染は深刻なところまでできています。

メキシコシティの空気を1日吸うと、たばこを40本吸ったと同じになるといわれていますし、カナダのトロントでは野外のジョギングをしないように警告が出されています。またロンドンの歩行者はマスクの着用を勧められています。経済発展が開発だと舞い上がる時代は終わったことを知らなければなりません。

私たちは利便性と効率ばかりにとらわれ、かけがいのない自然を知らず知らずのうちに破壊してきたのです。チョウの世界では、ここ10年ばかりのうちにめっきり少なくなった種がいます。ウラギンスジヒョウモン、ウラギンヒョウモン、クモガタヒョウモン、ヒオドシチョウ、スミナガシ、オオムラサキ、コキマダラセセリ、オオチャバネセセリなどです。原因は何か皆目つかめていません。ひょっとすると、今述べたようなことが関係しているかも知れません。

調べれば調べるほど生物の多様性が明らかになる

寄居町に南部敏明さんがいます。長い間、高校の先生をされていた方ですが、狩蜂というハチの生態の研究者です。ご専門の狩蜂の研究の他に県内の蜂のフォーナの研究にも取り組んでおられます。

埼玉昆虫談話会は創立30周年を記念して、県内に生息する昆虫の戸籍台帳をつくりました。「埼玉昆虫誌」という本がそうなのですが、この中のハチを担当されたのが南部さんです。南部さん

は埼玉県の手として1044種を記録されました。一口に1044種といいますが、これは大変な数字なのです。

世界にアリも含めた手は13万種いるとされ、そのうち日本から4130種が見つかっています。この日本産の四分の一が埼玉県で見つかったわけです。他府県はどうかといいますと、それまで一番よくわかっていたのが福井県で908種です。二番目が広島県の791種です。従って1044種は福井県を抜いて第一位になったのです。

およそ20年前の1978年に埼玉県教育委員会の肝入りで、県内の全動物のリストづくりがすすめられ、「埼玉県動物誌」という本にまとめあげられました。この時の手の担当も南部さんで、このときは481種を記録したのです。

つまり20年間で倍以上の563種ふえたのです。これは殆ど南部さん一人で調べたといっても過言ではありません。20年間に500種以上ふやすことがどれだけ大変か、やったことのない人にはわかりません。

それだけではありません。その後の半年で更に25種ふやしたのです。これは採集した標本のストックがあって、その時は名前がわからなかったのですが、その後判明したわけです。これはもう神業に近いことで頭の下がる思いがします。

毛呂山町に玉木長寿さんという方がおられます。「埼玉昆虫誌」でハエやカを担当されました。「埼玉県昆虫誌」は全3巻4冊、別巻1冊で成り立っているのですが、その2巻目の1冊、A4版405ページ全部をハエやアブやカで埋め尽くしました。県内で1447種を記録したのです。他府県で最多のものは富山県の338種ですから、およそ4倍強も調べられたわけです。これも別巻で43種追加し、今1490種となり、およそ日本産の三分の一が埼玉県にいる事がわかったのです。

玉木さんのすごいのは丁寧に標本を検討され、日本で初めてとか、本州で初めての記録だとか、そういう大きな発見がとて多いことです。そこで学界で評判になり、イギリスの大英博物館から、貿易会社を通して埼玉昆虫談話会に、入手したい旨の連絡がきました。

大英博物館というと、この世界でもっとも権威あるところで「Zoological Records」つまり動物学の記録というのを編纂しています。新種として発表された全世界の全動物を年毎にまとめて、毎年出版しているのです。新種を発表するときはこの「Zoological Records」をひもとなければならない、分類学者の必需品です。それを出版しているところです。埼玉昆虫談話会は、全国の同好会としては知名度のある方ですが、県民のほとんどの方が知らない集まりです。そこへロンドンから引き合いがくるのです。わたしはこの「埼玉昆虫誌」に携わった者の一人として誇りにおもいます。「埼玉昆虫誌」が数え上げた埼玉県産の昆虫は9360種です。1万に若干欠ける種数です。もとより都道府県単位としては最大の数字です。そのことは埼玉県に昆虫の種数が豊富であるということを示すものでなく、県内の昆虫はよく調べられている、という証しであります。本格的な昆虫学者でない、たんに虫が好きなたちが本業の合間に、ボランティアとしてコツコツ調べた結果なのです。

埼玉昆虫談話会では県内に産する昆虫を1万種にしようと話し合っています。9360種見つかったわけですからもう少しで1万種になるわけで、決して手の届かない数字ではありません。

まだまだ発見が続きます

虫の数がどれだけいるか———ということは調べる人の数や取り組みの度合いによって大きく異なります。この嵐山町には若くて優秀な豊田浩二さんが博物誌編纂室でお仕事されています。彼はおよそ一年前に嵐山町の甲虫をまとめました。どの位の甲虫が嵐山町に住んでいるのでしょうか。豊田さんは953種を記録しました。このうち埼玉県未記録種がなんと62種もいました。豊田さんが如何にすばらしい力量の持ち主であるかがわかるかと思えます。これだけ多くの甲虫を記録することは、ただ網を振って動くものを追うだけの月並みな採集法では無理です。ピーティング、スイーピング、ライト・トラップ、ベイト・トラップ、リター・トラップなど様々な方法を駆使して採集して、はじめて可能なのです。

虫は採ってはいけない、見るだけにしなさいという観察では、953の1割を見ることができかどうか。1割さえ危ういと思います。小さい生きものでは似ていて非なるものが沢山存在します。それを区別できる事が眼力であり、その人の力量であります。従って調べれば調べるほど種数はふえるはずですが、それが面白くてやめられない、ということもあります。種類数がふえるということは、生物の多様性が限りなく広がっていることだと思えます。

今後はたんに多様性を明らかにするだけでなく、その個々の種が他の種とどうからみながら生きているのか。それを明らかにしていく必要があります。この観察は決して難しいものでなく、素人でも取りかかれます。何が何を食べた。何の虫がどういふ花に来て蜜を吸ったか。そういう断片的

な事実をとらえて記録して行く事が必要です。この断片的な記録が集積されて、生物界のダイナミズムが明らかになっていくことでしょう。

自然を観察するという、難しいように聞こえるでしょう。しかし難しくも何ともありません。よく見るだけなのですから。例えばハコベという草があります。路傍に生え、春に白い花を咲かせる草です。それを見て「白い花が咲いている」と誰もが思うでしょう。しかし、これで止めてしまうのでは面白くありません。もっとよく見てみましょう。すると「花弁が10枚あるんだ」ということがわかります。そこで「ハコベは10枚の白い花弁のある花だ」ということになります。まあ、それはそれでたんに「白い花が咲いている」というよりはよく見ていることになります。しかし、それは一瞥をくれただけの見方です。もう少し手にとって近くで見えてみましょう。そうすると、ハコベの花はサクラの花のように5枚の花弁があり、その1枚1枚に深い切れ込みがあって、1枚の花弁が2枚あるように見え、全体で10枚の花弁があるように見せかけていることがわかります。ここまでくると「よく見た」ということがいえるでしょう。これが観察です。

忙しくてそんな暇がないという人がいます。しかしそんなに時間はかかりません。気になったらちょっと足を止め、覗きこんで観察してみましょう。そういう意味で、一生懸命自然の仕組みと取り組んでいる人は「見えないものを見よう」という努力をしているのです。ちょっとしたはずみで発見があります。発見があるからドキドキするようなトキメキがあって、楽しいのです。皆さんもちょっと立ち止まって、生き物を観察してみましょう。新しい発見に出会えるはずですよ。

北本市に住む小学生の宮崎あやかさん(13歳)は生きものの好きな方で、カメだとか虫だとか、いろいろな生きものを飼っています。同じ北本市に住む昆虫画家の小堀文彦さんが、オオカマキリの卵囊を描くことになって捜していたら、宮崎さんが持ってきてくれました。もう卵囊から子カマキリが出たあとのものです。普通は出終わったら捨ててしまうでしょう。しかし宮崎さんは保存していたのです。それを出して持ってきてくれたのです。小堀さんはこれを密封した容器に入れておきました。完全な抜け殻だと思っていたのですが、ある時ふと見るとカマキリの卵囊からハエが出てきたのです。ハエといっても普通にみられるイエバエやクロバエではありません。見られないハエです。

そこで小堀さんは専門家である玉木さんに、このハエを見てもらいました。玉木さんが調べた結果、それは *Kurumemya ongamea* という種であることがわかりました。このハエは学名の *Kurumemya* からわかるように、九州の久留米から記録があるもので、今まで九州だけで採れていました。触角第3節に刺毛があるのですが、それがみにあって♀になく、♀では刺毛であるべきところが突起になっているとても特異な種です。それが北本市で採れました。本州で初記録という珍しいものです。しかも九州からの記録はチョウセンカマキリの卵囊に寄生したもので、北本市のものはオオカマキリでしたから、寄主の方も初記録です。小学生の宮崎さんはこういう大切な記録に貢献したのです。生きものが好きで飼っていたことで、こういう記録づくりに手を貸すことができたのです。宮崎さんの名前は昆虫雑誌に記録され、永遠に名前を留めることになりました。

このように私達のまわりにはまだまだわかってないことが沢山あります。普通の人が何でもなく見逃してしまうことも、ちょっとその道をかじった人が出ると、たちまちこのような結果になるのです。繰り返しますが、一生懸命自然の仕組みと取り組んでいる人は「見えないものを見よう」という努力をしているのです。ちょっとしたはずみで発見があります。何かを発見したときの胸のときめきは、恋のときめきに似ています。皆さんもちょっと立ち止まって生きものを観察してみましょう。新しい発見に出会えるはずですよ。

参考文献

- 江村 薫 (1999) 有害帰化雑草を食害するブタクサハムシについて。
植物防疫53(4):138-141.
- (2000) ブタクサハムシ. 農業及園芸 75(1):210-214.
- 石井庸雄 (1998) 農薬で消えた目高. 朝日新聞11月30日付.
- 木村(史明) (1999) カラスノエンドウに集う虫たち. GONTA 9(2):4. 橿原市昆虫館.
- 無署名 (1998) 河川ダイオキシンの汚染主原因、水田の除草剤. 朝日新聞(夕刊)10月9日付.
- (1998) 環境ホルモン66%で検出. 朝日新聞 10月17日付.
- (1998) 日本海沿岸で低塩分異変. 埼玉新聞 10月18日付.
- (1998) 世界20地域の森林の危機. 埼玉新聞11月6日付.
- (1998) ダイオキシン汚染土壌浄化へ基準値. 朝日新聞 11月25日付.
- (1998) PCB南極周辺も汚染. 朝日新聞(夕刊)12月3日付.
- (1998) 環境ホルモン11物質検出. 朝日新聞(夕刊)12月7日付.

- (1998) フィルター素通り環境庁、対策検討へ、埼玉新聞 12月7日付。
- (1998) 水質改善なお停滞。朝日新聞 (夕刊) 12月8日付。
- (1998) 米国やカナダ、日本、カエルの奇形多発。埼玉新聞 12月8日付。
- (1998) 河川・湖沼環境ホルモン調査地点94%で検出。埼玉新聞 12月8日付。
- (1998) 人間中心の自然保護でよいか。朝日新聞 12月9日付。
- (1998) 研究者とは。朝日新聞 (夕刊) 12月12日付。
- (1998) シャンプー成分のジंकピリチオン低濃度でも稚魚に奇形。埼玉新聞
12月13日付。
- (1998) 環境ホルモン県、初の実態調査へ。埼玉新聞 12月19日付。
- (1998) PCB大気中から初検出。埼玉新聞 12月9日付。
- (1999) 環境ホルモン県調査、19種類検出。朝日新聞 6月16日付。
- (1999) 除草剤にダイオキシン。読売新聞 7月9日付。
- (1999) ダイオキシン過去の農薬から検出。埼玉新聞 7月9日付
- (1999) 「ダイオキシン農薬」野積み。読売新聞 7月10日付。
- (1999) アワビ卵巣から精子。朝日新聞。(夕刊) 8月25日付。
- (1999) 長野で続発野鳥大量死の怪。読売新聞 9月5日付。
- (1999) まだ残っていたDDT。読売新聞 9月5日付。
- (1999) アジアの海に広がる汚染。朝日新聞 (夕刊) 9月22日付。
- (1999) ダイオキシン汚染、都会の川、海も深刻。朝日新聞 9月25日付。
- (1999) ダイオキシン都の総合調査、魚介類から最高30ピコ。
埼玉新聞 9月25日付。
- (1999) ディーゼル車NO作戦。埼玉新聞 10月11日付。
- (1999) ダイオキシン基準環境庁案土壌1グラム中1000ピコグラム。
朝日新聞 (夕刊) 10月22日付。
- (1999) サンゴ受精率大幅低下。朝日新聞 (夕刊) 10月27日付。
- (1999) クジラ「環境ホルモン」汚染。読売新聞 10月30日付。
- (1999) 野生動物で高濃度。朝日新聞 10月30日付。
- (1999) 東京湾海底の泥調べたら……、朝日新聞 (夕刊) 11月26日付。
- 大久保真紀 (1998) 河川・海のダイオキシン。朝日新聞 11月11日付。
- 埼玉昆虫談話会編 (1997-9) 埼玉県昆虫誌 全3巻4冊 別巻1冊。埼玉昆虫談話会。
- 玉木長寿 (1999) 北本市で採集されたオオカマキリの卵莢から脱出したカマキリヤドリキ
モグリバエ (本州初記録)。寄せ蛾記 (93):2781-2784。
- 豊田浩二 (1998) 埼玉県嵐山町における甲虫相の研究。寄せ蛾記 (89):2583-2646。
- 山本智之 (1999) 貝の生殖器異常。朝日新聞 4月13日付。

U字溝の不思議：不思議なU字溝

河野 恭一郎

《話のきっかけとして》

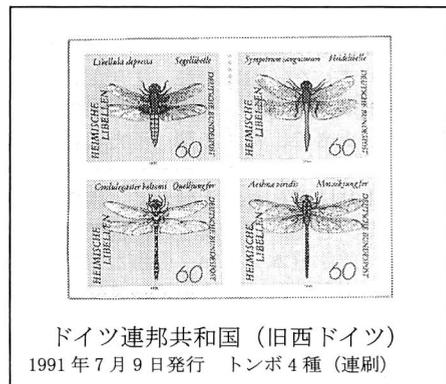
ちょっと古い話で恐縮です。日頃、チョウばかりに気を取られていながら、一時的ですが、オサムシに興味を持ちました。そのきっかけは、「郵便切手」なのです。1990年の夏、東京・八重州の大丸デパートで開催されていた「ファール昆虫展」をふらりと見に行ったとき、会場の片隅で「昆虫切手」を販売していました。

《頭書からわき道ですが、昆虫切手について少々》

昆虫切手とは、切手の図案に昆虫を描いたものをいい、わが国では、通常切手にオオムラサキやカブトムシなどを描いたもの、記念切手にギフチョウやミツバチを描いたものなどがあります。また、特殊切手として、わが国に生息する20種類の昆虫を、美しい図案とした「昆虫シリーズ」も発行されています。切手の図案に、花、貝殻、恐竜などをテーマにした切手を、それぞれ花切手、貝切手、恐竜切手などと呼び、これらをテーマチック、あるいはトピカル切手といいます。昆虫切手もその1つです。

会場の販売テーブルに並べられていた、初めて見る外国の昆虫切手が珍しく、グラシン紙の袋に入れてあったものを一通り、全種買い求めました。確か、数千円だったと思います。その後、今日まで、延々と昆虫切手の収集を続けていますが、そのとき、購入した切手は、今から見れば、駄物ばかりで、東欧の旧共産圏諸国であったチェコスロバキア、ハンガリア、ユーゴスラビアなどや、アフリカのブルンジ、タンザニアなど、切手を大量に発行する国のトピカル切手です。何年保有していても、価値が上がるといような代物ではありません。しかし、駄物でも、図案はそれなりに面白みがあって、チョウなどは、わが国に生息する種と共通する種も多く、キアゲハ、クジャクチョウ、アカタテハ（ヨーロッパアカタテハ）、モンキチョウなどが描かれており、特に、キアゲハを図案にした切手は、発行国も多いようです。ヨーロッパでは、パピリオ属は、キアゲハしかいないのかと思った位です。昆虫切手の図案には、多種多様な昆虫が取り上げられていますが、注意を引いたのは、オサムシが描かれていたことです。図案に登場する種は、キンイロオサムシ類（カラバス属、クリソカラバス属）、カタビロオサムシ類やイボハダオサムシなどでした。これらを描いた切手は、第二次大戦後から1989年までの間に、主にヨーロッパ諸国から15種類以上が発行されました。1990年頃以降、毎年、大量の様々なトピカル切手が乱発されて、切手収集の面白みは、失われつつありますが、「黒い切手」（「いかがわしい」という意味に近いような切手です）を発行する国が少なくありません（20か国位あるでしょうか、もっと多いかもしれせん）。明かに、マニアのフトコロを当てにした切手の大量発行が、今もって、続いています。昆虫切手として、旧東・西ドイツから発行された「蝶切手(5種類)」と「トンボ切手(4種類)」を一例として載せました。

さて、駄物の切手に描かれたオサムシについて、坂口浩平著「世界の昆虫」（保育社）などで、調べてみますと、オサムシ類は大変興味ある甲虫ということを知りました。



《似たような場所で、真似をしてみよう》

さっそく、身の回りで、オサムシを探し始めました。しかし、採るコツというか、要領がよく分かりません。野外では、視覚的に情報が得られやすいチョウばかりを採っていたため、オサムシのように、何処かに隠れている甲虫の採集については、ほとんど経験もない状態でしたから、あまり成果が上がりませんでした。それでも、マイマイカブリやアオオサムシなどは何頭か採集しましたし、埼玉ではないのですが、オオオサなどを採集しました。

そのような折、本誌70号にて、山崎さんが蓮田市におけるアカガネオサのトラップ採集記録を公表していましたが、「すしのこ」でそんなに簡単に採れるものかと思いました。私も、蓮田市の黒浜に行ってみようかと思いましたが、自転車では遠すぎます。どうも、生息場所は、それほど特殊な場所ではなく、ズブズブと足をとられるような湿地らしい、そのような場所を探せば、蓮田と上尾はお隣同士、いないこともなかりょうと考えました。

上尾市内を二級河川の鴨川が流れていますが、その右岸沿いの大谷本郷から戸崎にかけて、かなり広い荒地が続いています。秋には、ススキとセイタカアワダチソウしか生えないような場所ですが、適当な湿地もあり、マイマイカブリの死骸も見付けました。1994年6月、家内に手伝わせてトラップを50箇所ほど仕掛けました。容器は紙コップ、アイスクリームの容器や牛乳パックなど、ゴミにするような廃物を再利用し、餌は山崎さんの報告にあるように、「すしのこ」を調達し、家内の甥（月刊むし社の社員でした）から教わった、コンソメ・黒砂糖・焼酎を混ぜ合わせた変なスープも用意しました。仕掛けた場所は、上尾市大谷本郷、日産ジーゼルの社員寮辺りです。仕掛けて2日後に確認に行きました。ほとんどの容器は空っぽでしたが、2箇所だけにゴミムシが入っていました。形は似ていますが、狙ったものとは大分異なります。オサムシは不在なのかなと思いましたが、まだ仕掛けて2日目、結論を出す時間経過ではありません。さらに3日後、見まわりに行きました。その間、少し降雨がありました。紙コップ等には、どれもこれも、オオヒラタシデムシの死骸で満ちており、驚くというよりも、気持ちが悪くなりました。全部回収すれば、いかほどの量（もう、頭数では言い表せません）になったか。家内も掘り返すのをやがります。別の種類が混ざっていたかもしれませんが、もう、そんな気にはなれませんでした。3～4個の容器を回収しましたが、他は土で埋めてしまいました。オサムシを狙ったトラップ採集の結末は、このような有様でした。

《長くなりますが、話はこれからです》

この荒地にも、畑があったり、廃棄物の中間保管場所になっていたり、不法投棄の跡も見られます。水質汚濁も進んでいると思われる鴨川ですが、秋から冬に数種の野鳥、コサギやカモ類が飛来しています。キジも生息しています。表題のU字溝とは、この地区の畑の雨水排水路ですが、これが鴨川に流入する家庭雑排水の水路に接合しています。雑排水路は角型のやや大きな開渠で、常時汚水が流れており、周辺の下水道の普及率がまだ低いことをうかがわせませんが、U字溝には雨の日でない限り、ほとんど水は流れていません。U字溝には、近接の畑から土壌が流入して、それがかなり堆積していました。雨水とともに流入して堆積したものでしょう。細かい土壌で、養分に富み、花を植えるには都合がよさそうです。1993年の秋、これを採取して、園芸用に使おうと考えました。改めてU字溝をよく見ますと、いろいろな種類のゴミムシがいます。1種類や2種類ではありません。少し堆積泥を掘ってみますと、土の中にも多数のゴミムシがいました。オサムシは無理でも、ゴミムシは相当採集できそうです。ただ、ゴミムシはオサムシに比べると、はるかに小形で、幾ら多種類を多数集めましても、質・重量において、満足したとはいいい難いようです。しかし、熱心に集めました。おおむね、1年間の成果が写真の標本箱です。箱も自作で、台紙、ラベルも手作り、虫は木工用ボンドで固定しました。小さい甲虫の標本を作ることは、チョウの展翅よりも、厄介です。次ぎに、種名を調べるために、図鑑類を購入しました。北隆館の図鑑は、立派ですが、プレートの写真がよくありません。記載も形態が中心で、正直に言って、初心者には面白くありません。あまり活用した覚えはなく、未だ、本棚を飾るだけです。保育社や学研社の図鑑も、通り一遍の内容で、どこか似たような記述では、満足できるものではありません。毎日、多種多様な出版物が店頭と並ぶ日本ですが、高価な蝶類の図鑑を除けば、昆虫図鑑に手頃な価格で、かつ図版のよいものが、まだ、ないように思います。

標本箱の写真だけでは、採集品のデータが分かりませんので、以下にリストを示します。しかし、かなりの種について、同定には自信がありません（特に、小形のゴモクムシ類において）。最初から、言い訳とお詫びを含む、リストであることをご承知下さい。

《U字溝の不思議：不思議なU字溝》

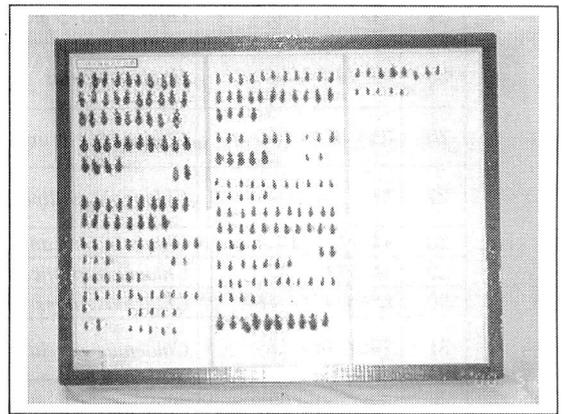
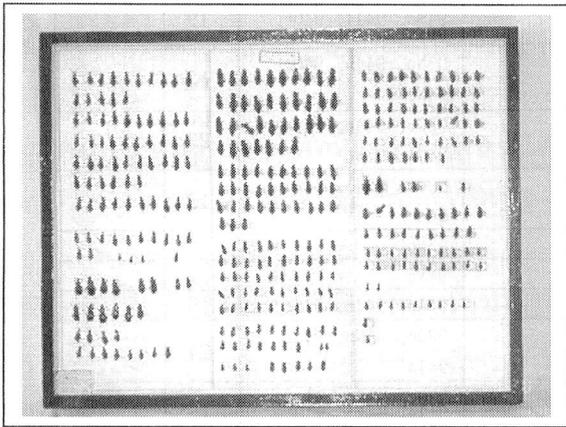
何故、U字溝に、ゴミムシ類がたくさん集まっていたのでしょうか。ゴミムシは、U字溝のような環境を好むのでしょうか。それとも、特異的なことなのでしょうか。図鑑の記載を見ますと、ゴミムシの中にはケラの卵を餌とするプレデターもいるようですが、U字溝には多いときに、7～8頭のケラを見ることがありました。土壌は腐食質に富み、ミミズも大量にいますし、カメムシ、ハネカクシ、ハムシなどが落ち込んでいたり、秋には3～4頭のホシホウジャクも飛び込んできました。アオオサムシなどは、自由に出入りできるはずですが、春には、越冬後の成虫が4～5頭見られました。

これは、「U字溝の不思議」な現象なのか、「不思議なU字溝」との遭遇なのか、分かりませんが、とにかく不思議な経験でした。廻りの畑や荒地には、おそらく多種多量のゴミムシ類が生息しているものと思われませんが、そこではアオゴモクムシ1頭を見つけ出すのも容易ではありません。また、標本箱の中身は、U字溝を悉皆調査した成果ではなく、ごく一部の採集品です。

《おわりに》

今、U字溝のある一帯は造成が進み、借地権付きの分譲住宅が建ち始めています。アカガネオサは採れませんでした。ゴミムシの採集には、本当に都合な場所でした。開発が及ぶことに対する思いは、山崎さんと同じものです（折りあれば、お会いして秘伝を教えてくださいたいのですが）。

私の虫捜しは、このU字溝といい、ジャコウアゲハのテトラポットといい、どうもコンクリート製品にポイントがありそうです。



ゴミムシ類の標本写真

=== U字溝で採集したゴミムシ類の種名リスト ===

番号	和名	学名	採集年月	採取数	備考
01	キシヌレナゴ ミムシ	<i>patrobus flavipes</i>	930c, 93No, 94Ap, 94Ma, 940c, 94No	22	
02	オオゴ ミムシ	<i>lesticus magnus</i>	930c, 93No, 94Ap, 94Ma, 94Jn, 94Jl	35	
03	キンナガゴ ミムシ	<i>poecilus planicollis</i>	93De, 94Ap, 94Ma, 94Jl, 940c, 94No	15	
04	マルガ タナゴゴ ミムシ	<i>pterostichus subovatus</i>	94No	1	
05	オオナガゴ ミムシ	<i>pterostichus fortis</i>	940c	2	
06	コガ シラナガゴ ミムシ	<i>pterostichus microcephalus</i>	930c, 94Ap, 94No	6	
07	オオクロツキヒラタゴ ミムシ	<i>synuchus nitidus</i>	93No, 94Jl, 94No	4	
08	マルガ タツキヒラタゴ ミムシ	<i>synuchus arcuaticollis</i>	930c, 94No	11	同定に不安
09	セアカヒラタゴ ミムシ	<i>dolichus halensis</i>	930c, 93No, 94Au, 940c	75	斑紋に4タイプあり

番号	和名	学名	採集年月	採取数	備考
10	オヒラタゴ ミミシ	<i>Platynum magnus</i>	930c, 93No	4	
11	コヒラタゴ ミミシ	<i>Platynum protensus</i>	930c, 93No, 93De 94Ap, 940c, 94No	11	
12	タンゴ ヒラタゴ ミミシ	<i>Anchus leucopus</i>	93No	3	同定に不安
13	アオグ ロヒラタゴ ミミシ	<i>Agonum chalconum</i>	93No, 94Ap	2	
14	マルガ タゴ ミミシ	<i>Amara chalcites</i>	930c	2	
15	コマルガ タゴ ミミシ	<i>Amara simplicidens</i>	930c, 94Ap	8	
16	ナガ マルガ タゴ ミミシ	<i>Amara macronota</i>	930c	17	
17	オオマルガ タゴ ミミシ	<i>Amara gigantea</i>	930c, 94Ap, 94Ma 940c	7	
18	ゴ ミミシ	<i>Anisodactylus signatus</i>	930c, 93No, 94Ap, 94Ma, 94Jn, 94Jl, 940c	16	
19	オオゴ モクムシ	<i>Harpalus capito</i>	930c, 93No, 94De 94Ap, 94Ma, 94Jl, 940c, 94No	55	
20	ケゴ モクムシ	<i>Harpalus vicarius</i>	930c, 93De, 94Ll 94Au, 940c, 94No	43	
21	ウスケゴ モクムシ	<i>Harpalus griseus</i>	930c, 94Jl, 94Au	53	同定に不安
22	コゴ モクムシ	<i>Harpalus tridens</i>	94No	2	同定に不安
23	キアシクログ モクムシ	<i>Harpalus niigatanus</i>	930c, 93No, 94Jl	63	同定に不安
24	オオスナハラゴ ミミシ	<i>Diplocheila zeelandica</i>	930c, 93No, 94Ap, 94Ma, 94Jl, 940c, 95No	19	
25	スジ アオゴ ミミシ	<i>Haplochaenius costiger</i>	93No, 94Jn, 940c, 94No	12	
26	コキベ リアオゴ ミミシ	<i>Chlaenius circumdatus</i>	930c, 94Ap, 94Ma, 94Jl, 95No	23	
27	アオゴ ミミシ	<i>Chlaenius pallipes</i>	930c, 93No, 94Jl, 940c,	12	
28	オオアトボ シアオゴ ミミシ	<i>Chlaenius micans</i>	95No	1	
29	キボ シアオゴ ミミシ	<i>Chlaenius posticalis</i>	94No	1	
30	ヒメキベ リアオゴ ミミシ	<i>Chlaenius inops</i>	94Ap, 94Jn, 940c	15	
31	クロヒゲ アオゴ ミミシ	<i>Chlaenius ocreatus</i>	930c, 93No, 94Ap 94Jn	24	
32	コガ シアアオゴ ミミシ	<i>Chlaenius variicornis</i>	930c, 93No, 94Ap, 94Jn, 94Jl, 940c, 94No	15	
33	ヨツボ シゴ ミミシ	<i>Panagaeus japonicus</i>	93De	1	
34	トックリゴ ミミシ	<i>Lachnocrepis prolixa</i>	94Ap	5	
35	アオヘリホソゴ ミミシ	<i>Drypta japonica</i>	93De	2	
36	ミイテ ラゴ ミミシ	<i>Pheropsophus jessoensis</i>	940c	1	

(注1)種同定の参考書: 学研生物図鑑「昆虫Ⅱ」甲虫: 監修 中根武彦、(株)学研社、1990(改訂版)

(注2)採集年月日

1993年	930c 93No 93De	10月31日 11月3日及び11月21日 12月3日及び12月5日
1994年	94Ap 94Ma 94Jn 94Jl 94Au 940c 94No	4月29日 5月13日、5月21~22日及び5月25日 6月18日及び6月25日 7月2~3日、7月6日、7月16日及び7月24日 8月26日 10月16日 11月5日
1995年	95No	11月5日

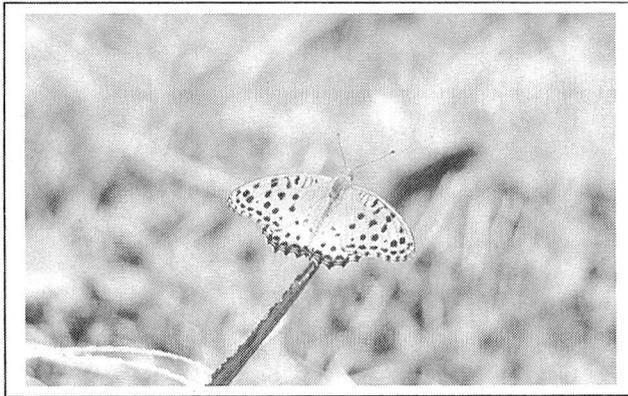
《追 伸》

先日、牧林会長からお葉書を頂きました。前回の投稿で書いた「荒川河川敷でクジャクチョウを見た」という証拠写真もない、人騒がせな1行でしたが、覚えていて下さってのお便りでした。会長には、この紙上をお借りして、お礼申し上げます。

本年、10月18日朝日新聞夕刊に、会長が北本市で「ナガサキアゲハ」を採集されたことの記事を見ました。私も、クジャクチョウよりは確かな出来事を、合わせて報告させていただきます。場所は同じ川島町側の荒川河川敷で「ツマグロヒョウモン♂」を見ました。下の写真が、そのときのものです。

私の郷里では、ナガサキアゲハもツマグロヒョウモンも採集できます。徳島県では、ツマグロは越冬できる土地だと思います。平均気温が1℃上昇すると、カシ・シイ帯の限界が数十km北上するという何を何の本で読みました。温暖化は現実のものでしょうか。3年前の8月、東北道の川崎インター（宮城県）でモンキアゲハを見たときは、もうここまで来ているのかと思いましたが、埼玉県のナガサキアゲハは、それ以上の驚きです。

次回への投稿の機会を確保しておきたいために、また性懲りもなく人騒がせな一言を書かせて下さい。『荒川河川敷でクマゼミの鳴くのを聞いた』。今年の8月のことです。これはすでに少し古い情報でしょうか。最後に、今年の秋もテトラポットには、たくさんのジャコウアゲハの蛹がみられました。



荒川河川敷（川島町側）で見たツマグロヒョウモン♂（撮影 2000年10月7日）

（かわの きょういちろう 〒362-0041 上尾市富士見1-18-3）

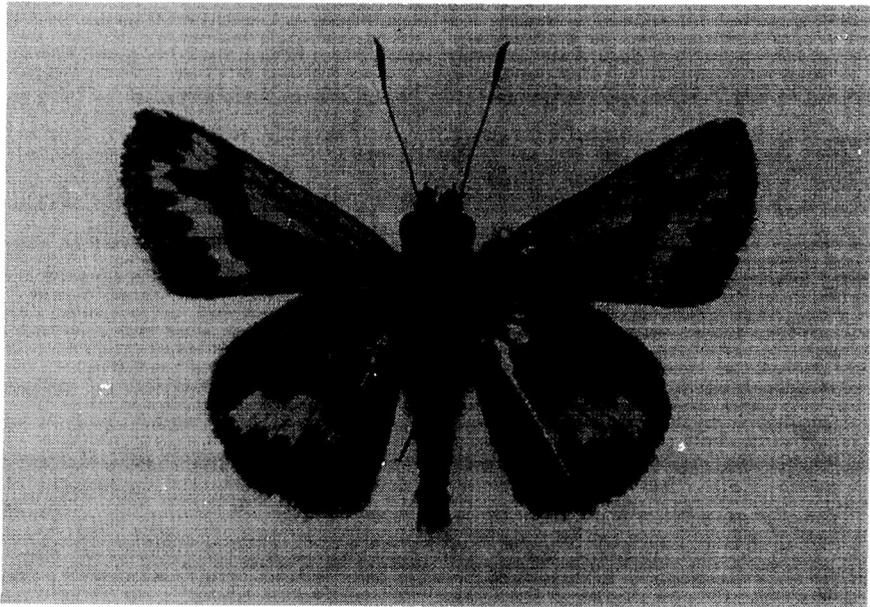
彩湖（戸田市道満）でキマダラセセリの成虫を11月に採集

萩原 昇

筆者は、本年11月4日に彩湖（戸田市道満）で蝶類の観察を試みたところ、第3化の個体と考えられるキマダラセセリの1♂成虫を採集したので写真を添えて報告する。

キマダラセセリは、埼玉県の平野部から低産地にかけて分布し、年2化性であり、第1化が6月～7月・第2化が8月～9月にかけて成虫が見られるのが通常である。戸田市における周年発生の記録は、1991年の記録が「戸田市道満付近の蝶による環境評価」（市川和夫、1993年3月、戸田市博物館紀要第8号、P. 22～26）に記録されており、初見日が6月5日で、最終確認日が9月3日と記録されている。

この記録から判断しても、今回採集した個体は第3化の個体と考えられ、本年の高温の気象と関連が深いと考えられる。



採集データ 戸田市道満（彩湖）：1♂, 2000.11.4, 萩原 昇.

同日、観察された他の蝶類

- キチョウ（夏型の♂と秋型の♀の交尾を確認した）
- モンシロチョウ
- ヤマトシジミ
- ベニシジミ
- キタテハ
- ヒメウラナミジャノメ
- チャバネセセリ

以上

埼玉県産半翅類雑記 (17)

野澤 雅美

□ 埼玉県におけるツヤアオカメムシ (異翅目カメムシ科) の記録の整理

埼玉県のツヤアオカメムシ *Glaucias subpunctatus* (WALKER) の記録については、これまで本誌に報告 (野澤, 1994・1998) してきたが、この程度県西部地方から (川越市及び所沢市) 新たに採集したので、これまでの本種の記録を改めて整理しておく。

埼玉県での最初の記録は、1966年に浦和市常盤町で得た蕨高校の生物部によるもので、1990年あたりから県内の記録も相次いでいる。

- | | | |
|----------------------|-------------------|------------------------------|
| 1 浦和市常盤町 | 1966年10月13日 (1個体) | 蕨高等学校生物部 採集 |
| 2 小鹿野町合角 | 1989年9月16日 (1♂) | |
| 3 長瀬町長瀬 (自然史博物館) | 1991年9月20日 (1♀) | |
| 4 寄居町桜沢 | 1991年9月23日 (1♂) | |
| | 1992年7月20日 (1♀) | |
| | 2000年3月1日 (1♀) | |
| 5 北本市石戸 | 1991年10月13日 (1♀) | 小堀貴文氏採集 |
| 6 滑川町 (森林公園) | 1992年1月12日 (1♀) | |
| 7 小川町仙元山 | 1994年8月6日 (2♀) | |
| 8 江南町御正新田 (農業教育センター) | 1997年10月21日 (1♂) | |
| 9 川越市小仙波 (川越総合高等学校) | 2000年5月26日 (1♂) | 校内で死個体を発見 |
| | 2000年9月18日 (1♂1♀) | 灯火を求めて窓ガラスに飛来したもの。 |
| 10 所沢市荒幡 | 2000年9月17日 (1♂1♀) | 石澤直也氏採集 |
| | | 石澤氏によれば、コブシの実に多数みられたとのことである。 |

筆者の知る限りこれまでに9市町から記録され、手元に15個体の県内産の標本が収蔵されている。本種は、ミカン・カキ・ナシ・ウメ等の果樹の害虫でもあるが、元来は南方系の種類で、これほどまで従来分布しなかった種が記録されるようになったのは、交通機関や物流の発達・ネット化等に加えて明らかに温暖化が、分布の拡大の背景にあると考えられる。

□ 嵐山町でピロウドサシガメ (異翅目サシガメ科) を採集

サシガメ科のピロウドサシガメ *Ectrychotes andreae* (THUNBERG) は、サシガメ科ピロウドサシガメ亜科に属し、体長12~14mmの頭部及び胸部が光沢のある藍色の美しい種である。植物の根際や落葉下で生活し、他の昆虫やヤスデ等の多足類を捕食することが知られている。

埼玉県では記録の少ないサシガメで、これまで東松山市神戸・小川町青山・毛呂山町大谷木から知られているにすぎない。(林, 1998)

筆者は、嵐山町で本種の死個体を路上で得たので新たに記録しておく。中脚と後脚はいずれも破損しているものの、頭部・胸部及び腹部には損傷はみられない。

嵐山町千騎沢 1998年10月10日 (1♂)

県内各地でシロヘリクチプトカメムシ (異翅目 カメムシ科) を記録

野澤 雅美・松本 克臣

埼玉県からは、カメムシ科クチプトカメムシ亜科は、これまでに7種が記録されている。(林, 1999)筆者らは、埼玉県内で昨年秋から、これまでに埼玉県に分布するはずのないシロヘリクチプトカメムシ *Andrallus spinidens* (FABRICIUS) を採集したので、記録を整理する。

本種は、東洋区・オーストラリア区・新熱帯区に広く分布する南方系の種である。日本では、本州南部・四国・九州・南西諸島に分布している。捕食性で、農作物に発生するヨトウムシ類等を中心に捕食することが知られている。

埼玉県における最初の記録は、野澤によるもので、1999年8月に江南町にある県立農業教育センターに栽培されていたサツマイモ畑にいた雌1個体である。同所からは、その後水田からも1個体が得られている。今年になって、川島町・浦和市・川越市からも記録が相次いだ。中でも川島町の個体は、筆者の一人松本が確認したもので、その個体数も多い。入間川の河川敷の土手で、イネ科植物が生える環境である。松本は、幼虫を含む多数の成虫を確認したほか、採集した雌成虫から規則的に産卵された56卵を得ている。

江南町御正新田 (埼玉県立農業教育センター)

1999年8月24日 (1♀)

1999年11月1日 (1♂)

川島町出丸中郷 (入間川河川敷)

2000年9月23日 (2♂ 1♀)

2000年10月4日 (3♀)

浦和市秋ヶ瀬

2000年10月12日 (1♂) 内田正吉氏採集

川越市名細 (入間川河川敷)

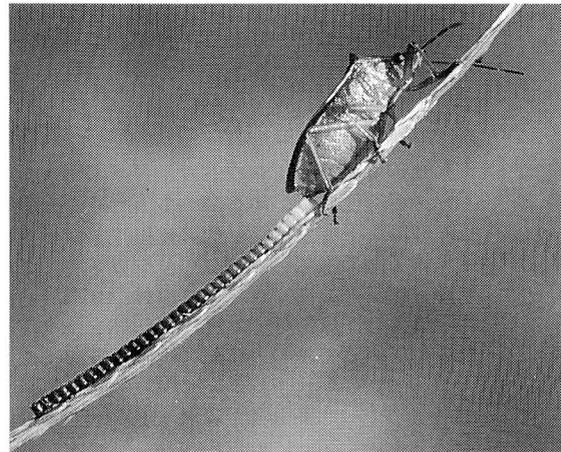
2000年10月18日 (1 ex.) 坂本彰司氏確認

入間市宮寺大森池

2000年10月7日 (1♀) 石澤直也氏採集 (ハグロハバチ捕食中)



鱗翅類の幼虫を捕食する成虫



産卵中の雌成虫

シロヘリクチプトカメムシの採集標本は、野澤が所蔵している。資料を提供して頂いた内田氏及び石澤氏に御礼申し上げる。

(のざわ まさみ 〒369-1202 寄居町桜沢2506-4)

(まつもと かつおみ 〒350-0042 川越市中原町2-19-1 パークファミリア911)

多摩湖（村山貯水池）での クロコノマチョウの記録

鷺尾 洋一

最近、地球温暖化に伴う南方系の蝶の北上をしばしば耳にするようになった。
やや古い記録になるが、筆者は埼玉県と東京都との県境に位置する多摩湖の湖畔で本種を採集しているのを報告する。

記 録：クロコノマチョウ *Melanitis phedima oitensis* MATUMURA 1♀（秋型）

採集日時：1998年11月1日 12時ごろ

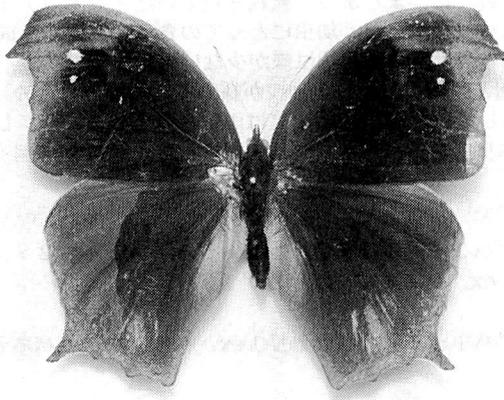
採集場所：東京都東大和市多摩湖

採集者：藤井 告 標本は筆者が保管

採集地は多摩湖の湖畔のコナラを中心とする林中の薄暗い場所であった。

歩いているときに樹木の間から飛び出してきて、林床にとまったところを筆者の前を歩いていた採集者が採集した。

採集個体は完璧で非常にきれいである（下の写真の個体）。



また、同じ時期に南房総でもクロコノマチョウを採集しているのであわせて記録しておく。

記 録：クロコノマチョウ *Melanitis phedima oitensis* MATUMURA 1♀（秋型）

採集日時：1998年11月3日

採集場所：千葉県鴨川市 東大演習林内

採集者：鷺尾 洋一 標本も筆者が保管

林道脇の木の幹にとまっているところを採集した。

妙法ヶ岳のヘリグロチャバネセセリ

巢瀬 司

2000年7月23日(晴)、34年ぶりに大滝村の三峰山に蝶の採集に出掛けた。目的はコキマダラセセリ、スジグロチャバネセセリ、ヘリグロチャバネセセリなどの生息の確認である。三峰山周辺は不思議なくらい蝶が少ない。ゼフィルス類以外は、普通種がいくらかいるだけである。ただ、巢瀬(1990)に記した1965年8月17日のコキマダラセセリ、スジグロチャバネセセリ、ヘリグロチャバネセセリの記録と、1966年8月7日のコキマダラセセリ、スジグロチャバネセセリの記録は気になっていた。これらのセセリチョウのほとんどは、妙法ヶ岳の山頂付近で採集している。今でもこれらのセセリチョウは、その山頂にいるのだろうか？

妙法ヶ岳は小さな岩峰である。三峰山ロープウェーからは、規模は小さいが急斜面の岩場が見える。その岩場がこれらのセセリチョウの発生源なのだろう。

2000年7月23日に確認した蝶は、以下の通りである。

三峰神社～妙法ヶ岳分岐点

ミヤマカラスアゲハ1♂, クロアゲハ1♂, キチョウ1♀, ヒメキマダラヒカゲ1♂

妙法ヶ岳山頂

ミヤマカラスアゲハ2♂, スジボソヤマキチョウ1♂, コジャノメ1♀, ルリシジミ1♂

妙法ヶ岳分岐点～霧藻ヶ峰

アサギマダラ1♂, クロヒカゲ7ex, ヤマキマダラヒカゲ2♂, ヒメキマダラヒカゲ1♂

霧藻ヶ峰山頂

キアゲハ2ex

ロープウェー山頂駅の近くに、まとめて植栽されていたオカトラノオの花にも、リョウブやノリウツギの花にも蝶は見られなかった。幼虫にとっての食草・食樹も、成虫にとっての吸蜜源も少ないからなのだろうが、本当に三峰山周辺は蝶が少ないと感じた。

2000年8月9日、前回、目的のセセリチョウが採集できなかったため、再び妙法ヶ岳に登った。当日は午前中は薄日が差していたが、12時頃には雨になってしまった。しかし、霧雨の中、妙法ヶ岳山頂で34年ぶりにヘリグロチャバネセセリを採集した。2000年8月9日に確認した蝶は、以下の通りである。

三峰神社付近

ミヤマカラスアゲハ2♂, ルリタテハ1ex, ジャノメチョウ2♀, クロヒカゲ2ex, ヤマキマダラヒカゲ1ex, ヒメキマダラヒカゲ1♂

妙法ヶ岳山頂

ミヤマカラスアゲハ1♂, アオバセセリ1ex, ヘリグロチャバネセセリ1♂(採集)

引用文献

巢瀬 司(1990) 埼玉県内の1960年代の蝶の記録. 寄せ蛾記(57): 1044-1051.

(すのせ つかさ 〒337-0976 浦和市寺山 806-1)

浦和市でアサギマダラを目撃

巢瀬 司

2000年10月11日、浦和市代山でアサギマダラを1個体目撃したので報告する。午前8時15分にアベリアの花の近くをゆったりと飛翔していた。長距離移動のコースを間違った個体なのかもしれない。

(すのせ つかさ 〒337-0976 浦和市寺山 806-1)

浦和市内でのヒオドシチョウの記録

巢瀬 司

ヒオドシチョウは「謎の蝶」である。1960年代には3月から4月に、上尾市中妻などの雑木林の中の日だまりで、いつでもその姿が見られたし、6月の新成虫も見られた。ところが夏になるとその姿は消え、秋になってもその姿は全く見られないのだ。山地に移動しているのだろうか？ それとも近くのだこかで夏眠しているのだろうか？

とにかく、近年、浦和市内で以下のヒオドシチョウを確認したので記録しておく。

浦和市代山 1998年5月27日 1ex (新鮮な個体がスズメバチ類と共にクヌギの樹液を吸っていた)

浦和市大崎公園 1998年6月21日 1ex (新鮮な個体がアペリアの花で吸蜜していた)

浦和市代山 2000年7月10日 1ex (新鮮な個体が校舎の廊下にいた)

ちなみに、浦和市代山近辺では、1987年6月5日の浦和市五斗蒔の記録(巢瀬, 1996)以後、約10年間、本種は確認されていなかった。

引用文献

巢瀬 司 (1996) 浦和の昆虫. 浦和市史研究 (11) : 1-24.

(すのせ つかさ 〒337-0976 浦和市寺山 806-1)

大滝村で採集した蝶類2種

豊田 浩二

大滝村産のゴミムシ調査のために何度か足を運んでいるが、副産物として下記の蝶類2種を採集しているので記録しておく。

・ *Nymphalis antiopa asopos* (FRUHSTORFER) キベリタテハ
1頭, 4.V.2000, 大滝村雲取林道大洞橋付近, 筆者採集, 保管.

・ *Celastrina sugitanii sugitanii* (MATSUMURA) スギタニルリシジミ
1♂, 記録は前種と同様, 筆者保管.

キベリタテハは越冬個体であり、色が抜けたようなぼんやりした色彩である。ちょうど車を停めたところにとまっていたので運悪く捕まってしまった。スギタニルリシジミはこの個体意外にもいくつか飛んでいたが、サンプルとして1個体だけひろってきた。ちなみに当日は天気も良く、絶好の採集日和であった。

(とよだ こうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686)

セイヨウミツバチがアシタバの黄汁を食べる

阿部 功

筆者の家の庭には、伊豆大島産のアシタバが植えてある。

夏になると毎年キアゲハの幼虫が多数見られ、アシタバの葉は見事に食い荒らされる。

そんな様子を観察していたときキアゲハの幼虫がつけた食痕から出た、黄汁に多くのミツバチが飛来しているのに気づいた。

よく見るとミツバチは黄汁の硬くなった部分を、夢中になってガリガリと音をたてて食べているのではないか、働き蜂が花を訪れ求蜜をする行動は知られているが、アシタバの黄汁を食べる行動は珍しいと思われるので報告します。

記録

セイヨウミツバチ 2000.8.26 越谷市赤山町3丁目 アシタバの黄汁を食べる。

謝辞

ミツバチの同定にご協力頂いた、牧林会長、巢瀬司氏に厚く御礼申し上げます。



アシタバの黄汁を食べるセイヨウミツバチ

外秩父山地におけるエゾハサミムシの記録

豊田 浩二

埼玉県において *Eparchus yezoensis* (MATSUMURA et SHIRAKI, 1905) エゾハサミムシはこれまで採集例の少ない種であるが、筆者は表題のとおり外秩父山地にて本種を複数確認、一部採集しているので報告する。

このたび本種が採集されたまず1ヶ所目は、皆野町の養山である。当地からはすでに中村(1988)で記録されているが、北斜面の落葉広葉樹林より本種が再び確認された。同行の新井氏と共に斜面ガレ場表面のリターを振ったところ、厚く積もった落葉中から本種が多数あらわれた。本来ならば丹念に調べたいところであるが、いかんせんこの場所は蚊がとても多いようである。虫除けも持たない筆者らはとて採集どころではなく、数回振るうのが限界であった。結局短時間の採集でささと逃げ帰ったのであったが、見つけ採りも含めて10頭以上が確認できた。このうちサンプルとして5頭を持ちかえった。

もう一ヶ所は、これより少し南に位置する丸山・県民の森の横瀬町側である。大野峠にほど近い場所に駐車場があり、ここから歩くこと3分ほどの場所に尾根を潜り抜けるトンネルがある。このトンネル内部の壁面に本種が這っているのが観察された。じっと見ていると複数個体が次々と姿を見せることから、「これはすごい」とひとり感動しながら彼らの来る方に歩を進めていった。トンネルを抜けると右手北斜面にミズナラ林があり、どうやらこの林床から歩いてきているようであった。よく見るとトンネルだけでなく、あちこちのアスファルト面にも這い出している。養山での例を元に林床の落ち葉が積もった場所を調べてみたところ、たくさんの個体が落葉中に確認できた。ちなみにこの日は昆虫教室の下見で訪れたこともあり採集は一切しなかったが、後日再び訪れた際には子供たちに普段あまりお目にかかれないエゾハサミムシをたくさん見せてあげる事が出来た。なかには「家で飼いたい」と持って帰った子もいたが、その後どうなったかは筆者の知るところではない。筆者も「家に持って帰って標本にしたい」といくつか拾ってきた。データは最後に示す。

今回の採集例とこれまで筆者の知り得た知見をまとめると、埼玉県内におけるエゾハサミムシの生息環境は以下のような場所、時季であることが推察される。

- ・山地の自然林、もしくはそれに近い2次林で、ナラやケヤキ、サクラ等の落葉広葉樹が主体である場所。
- ・日当たりはあまり良くない場所の方が良い。北斜面に多いようである。恐らく湿度等の好みによるものであろう。
- ・木の根元や厚く積もった落葉中に多い。また、地下部がガレ場(石の重なった場所)である場合はこの中にも多少見られる。
- ・採集例は特に夏季に多い。

上記のような場所以外にも当然生息するであろうが、現時点ではエゾハサミムシの好む生息環境はこの様にあらわすことができる。本種の得られる環境について、ハサミムシの分類学者である西川勝氏に会う機会があったので伺ってみたところ「山沿いの広葉樹林で落葉下に生息し、決して少ない種ではない」との返答をいただいた。恐らく埼玉県でも山沿いではある程度普通に見られる種類なのであろう。今後もこうした場所で本種を確認すると共に、未記録地での採集例が増えた時点で報告してゆきたいとおもう。いずれは県内の詳細な分布図ができることであろう。なお、今回の採集地でのデータは以下のとおりである。

2♂♂ 3♀♀, 皆野町養山(美の山公園北側の斜面林), 15.VII.2000, 新井志保及び筆者採集, 筆者保管。

6♂♂, 横瀬町丸山(県民の森トンネル付近の北斜面), 10.VIII.2000, 筆者採集, 保管。

末筆ながら、本種について御教示いただいた徳島県の西川勝氏に、また確認作業を手伝っていただいた東京農業大学昆虫分類研究室の新井志保氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

中村修美, 1988. 養山の「エゾ」二題. 自然史だより, (7): 7. 埼玉県立自然史博物館.

ホソアカガネオサムシ採集奮闘記

豊田 浩二

はじめに

Carabus vanvolxemi vanvolxemi PUTZEYS ホソアカガネオサムシの埼玉県における採集例は近隣の都県に比べて著しく少ない。吉越他 (1998) でも『埼玉県内では産地、個体数とも少ない模様。』と述べられており、県内でいかに採集例が少ないかがうかがいしれる。筆者はオサムシ分類学者で大学の先輩でもある水沢清行氏からの依頼で、埼玉県産のホソアカガネオサムシを3年前から探しつづけていた。この度ようやくその勇姿を拜むことが出来たので、この記録と共にそれまでの経過を記しておきたい。

経験は「一度だけ」

水沢氏の依頼があった時、筆者は本種を一度しか採集したことがなかった。学生のころ奥多摩の三頭山頂付近で朽木から掘り出したのが唯一筆者の採集経験であり、特に興味もなかったので標本はだれかにあげてしまった。そんなわけで、いざ採集といってもどうしたら良いか全くわからず、とりあえずこれまでの既知産地をたずねて歩くことにした。恩師岡島秀治先生によれば「あんなものは冬に山登って、朽木崩せばたくさんでるよ」とのことであり、筆者もその言葉のとおりすぐ採れるものと信じていた。

志賀坂でぼうず

最初に訪れたのは小鹿野町の志賀坂峠である。埼玉県側はどこからも登れそうにない感じであったので、群馬県側の駐車場に車を止め、そこから尾根沿いに出て埼玉県内に入り込んだ。群馬県側は沢の周囲にカタクリの大群落があることで知られ、自然度の高い植生が見られた。ところが埼玉県側に来るとほとんどがヒノキの造林であり、とてもオサムシがたくさんいるようには思えない。なんとか落葉樹の二次林を探し出し朽木を掘ってみたが、乾燥していて全くダメである。日当たりが良すぎるのであろうか。オサムシどころか甲虫一匹すら出てこない。なんでこんなに虫がいないのだ?と疑問に思いながら結局丸一日掘ってまわったが、収穫なしで見事に出鼻をくじかれた。しかも、どこかで運転免許証ごと財布を落してしまったらしい。小鹿野の警察に一応は届けたものの、結局とられるだけ取られたまま、最悪の出だしであった。

いざ三峰へ!!

普通なら“人にあげる虫”のためにこんなひどい目にあったら、もう二度と探ってやろうなどと思わないのかもしれない。しかし採れない悔しさからか、こうなれば本種の記録が集中する三峰から雲取までの尾根沿いのでがんばるしかない、この地にかよってベイトトラップをかけたり冬季のオサ掘りに励んだ。トラップ回収なんぞは夜中に家を出て、真っ暗な登山道をひたすら登って朝日と共に下山なんてこともあった。また夜中にブナ帯をつきかけた際、あきらかにシカではない、恐らくクマであろうケモノに出くわしたこともあった。それでもこの尾根沿いはたいへん面白いところであり、筆者の採集欲を十二分に満たしてくれた。二次林の林床ではエサキオサムシやヒラタゴミシ類がたくさん採れたし、ガレ場のような場所ではナガゴミシ類が何種類も得られた。そして山地に生息するチチブホソクロナガオサムシとオクタマルマンオサムシもすぐに採集することが出来た。またとても不思議なことに、エサキオサムシに混ざってアオオサムシが1頭だけ得られた。標高1,200メートル付近である。アオオサムシは平地のオサムシではなかったのか?とすぐ疑問に思いつつも水沢氏にこの珍客をお送りしたところ、たいへん喜ばれていた。しかし、なぜかホソアカガネオサムシだけが採れない。いつのまにかナガゴミシ類をせっせと採っている自分にムチ打って、オサムシがいそうな場所を片っ端から探していった。

採れない虫

あっという間に2年が過ぎ、ホソアカガネオサムシは自分の中で“採れない虫”の代表格となっていた。水沢氏からの電話でも「なかなか採れないんですよ」と言い訳だけになってしまい、つい

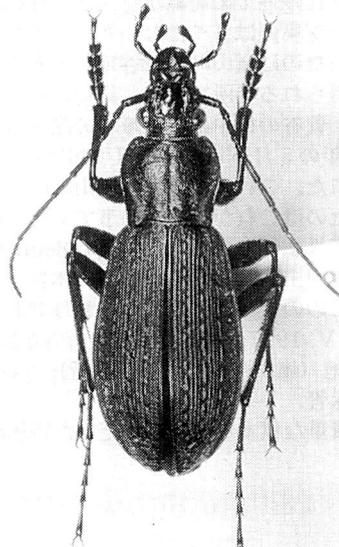
にはオサムシを採集に行く気力さえ無くなりかけていた。実は筆者はゴミムシを研究しているのにベイトトラップをかけるのがあまり好きではなく、そのことがさらに採集意欲の減少に拍車をかけていた。

そんな折、友人の橋村氏から採集の誘いがかかった。どうやら新しいベイトトラップの素材を見つけたのでこれを試したいらしい。この新しい素材とはプリンカップのことである。これが結構頑丈であり、しかも設置しやすく汚れも落としやすいときていた。余談ではあるが、橋村氏の採集用具にかかる情熱は並大抵のものではない。とにかく発想がすばらしいのである。いまや「農大式」と勝手に名づけられ有名になってしまったオーダーメイド吸虫管「すごいよマサオさん1号」も彼の発案である。さらにトラップを設置できないような難所にその場に行くことなくかけられるトラップなども開発していた。彼の選んだカップの使い心地にはトラップぎらいの筆者も感動し、苦も無く100個ぐらいは普通にかけられるようになった。早速このプリンカップを大量に持って大滝へ飛び、三峰登山口から地蔵峠の間をトラップで埋め尽くしていった。

つ、ついにGet!!

5日後に再び回収に行くと、ブナ帯に設置したトラップにはクロナガオサムシがたくさん入っていた。エサキオサムシもところどころ落ちている。筆者の大好きなナガゴミムシも勿論はいつている。一個づつ回収してゆくと、60個辺りを過ぎたところで危機感が湧いてきた。「これで採れてなかったらどうする？」余計な考えをめぐらしながら、ピンセットでトラップ内の歩行虫を取りだし毒ピンに放り込んでゆく。トラップ設置時に土砂降りだったこともあり、全く入ってないのではと恐れていたのだが、大型毒ピンが2本でも足りないくらいでトラップは確実に成功していた。サナギ粉を誘引剤に使用したため水没しても臭いが消えなかったのだ。乳酸菌飲料では水没するとほとんども虫が落ちないが、サナギ粉は全天候型で虫の落ち具合も良い。そしてついに、やっと、

やっと入っていたのである。さんざん苦しめられたホソアカガネオサムシ、ここまでの遠き道のりを回想しながらしばしばその勇姿を見つめた。しかもこのトラップに落ちていた面々といったらすごいもので、ひとつのカップにホソアカガネオサムシ、オクタマルマンオサムシ、チチブホソクロナガオサムシ、クロナガオサムシ、エサキオサムシの計5種類のオサムシと、さらにはニッコウオオズナガゴミムシまでもが落ちていたのである。まさに落ちるべくして落ちた!と言った感じであった。この隣のトラップにもやはりホソアカガネオサムシが落ちていたが結局この場所だけであり、200個近くかけてたったの3頭であった。恐るべし、まさに珍品である。すぐさま電話し、水沢氏がたいへん喜ばれたのは言うまでもない。



大滝村産のホソアカガネオサムシ♂

ホソアカガネオサムシのデータ

2♂♂1♀, 29.IX.2000, 埼玉県
大滝村炭焼平(標高1,250m, 妙法ヶ
岳付近), 筆者採集, 水沢清行及び筆
者保管(図)。

おわりに

筆者が本種を採るために見てまわった採集地はたかが知れていよう。それでも何となく感じたことは、以前知られていた産地である志賀坂峠や三峰山などは乾燥化が進み採集困難になっているのではないかということである。今回得られた場所はブナ帯で湿度が高く、リターの厚い良好な環境

である。もしこうした場所が本種の本来の生息地なのだとしたら、近代におけるスギ・ヒノキの造林地拡大は確実に本種を追いやっていると言える。しかし、筆者はなんせ2回しか採集経験が無いので詳しい事はわからない。今後も産地の把握の意味で本種を探してゆこうとおもう。あくまで適当にはあるが…。

末筆ながら本種を採集する機会を与えてくださった横須賀市の水沢清行氏に、また採集方法について御教示いただいた東京農業大学昆虫資源研究室の岡島秀治先生、足立区の橋村正雄氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

吉越肇他, 1998. 埼玉県の鞘翅目 (甲虫類). 埼玉県昆虫誌III, pp.93-340. 埼玉昆虫談会.

(とよだ こうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686)

クビアカトラカミキリの比企丘陵における記録

豊田 浩二

Xylotrechus rufilius BATES クビアカトラカミキリは埼玉県昆虫誌をみると秩父地方での記録が多く、平野部や丘陵地での記録が見当たらない。未発表記録もあるとのことであるが、いずれにしても丘陵地での採集例は多くはないものと思われるので、比企丘陵での例を報告しておく。

本種が得られたのは嵐山町の菅谷地区である。ちょうど秩父山地の末端にあたり、山地性の昆虫類がときどき得られる場所である。最初に得られたのは菅谷館跡で南部敏明氏が採集されたものである。その後、菅谷の街中にある筆者の職場内で、たまたま屋内に飛び込んできたものが採集された。また2000年の5月下旬から7月中旬にかけては菅谷館跡周辺でクヌギ伐採木に飛来する個体が多数観察された。これまで筆者は嵐山町内で甲虫類の調査を続けてきたが、本種がこのようにたくさん発生したのはこれが初めての事である。観察した個体の中には上翅の前半部白紋が消失傾向にあるような変異個体も見られ、体長も8mmくらいから14mmに達するものまで様々であった(保育社の原色日本甲虫図鑑を見ると本種の体長は9~13mmと記されている)。観察した個体のうち採集してあるもののデータは以下のとおりである。

1頭, 10. V. 1997, 嵐山町菅谷 (菅谷館跡), 南部敏明採集, 筆者保管; 1頭, 10. VIII.

1998, 同地 (嵐山町役場菅谷出張所); 6頭, 2. VI. 2000, 同地 (菅谷館跡), いずれも筆者採集, 保管.

末筆ながら、貴重な標本を恵与いただいた寄居町の南部敏明氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

林 匡夫他, 原色日本甲虫図鑑. IV, 438pp. 保育社.

吉越肇他, 1998. 埼玉県の鞘翅目 (甲虫類). 埼玉県昆虫誌 III, pp.93-340. 埼玉昆虫談会.

(とよだ こうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686)

埼玉県産ヒラタゴミムシ族の知見 (1)

豊田 浩二

1. はじめに

Platynini ヒラタゴミムシ族はコウチュウ目オサムシ科に属し、ナガゴミムシ族やクチキゴミムシ族などと共にナガゴミムシ亜科に含まれる大きな一群である。一般に扁平な体型をしており、食肉性で湿潤な環境に生息する種類が多い。生息環境の好みは多様であり、湿地に生える草本の隙間に見られるものから樹上性の種、あるいは複眼の退化した地中性の種類まで幅広い構成である。

県内におけるヒラタゴミムシ類の記録は、埼玉県昆虫誌に掲載された42種と別巻で追加された1種の合計で43種がこれまでに知られている。関東においてこの種数は、まとまった記録のある神奈川県(54種(平野, 1998))や茨城県の47種(高野・大桃, 2000)、千葉県(33種(笠原, 1999))と比べてみても良く調査されているほうである。しかしながら埼玉県の平野から亜高山帯に連なる立地条件と自然度の高い奥秩父の可能性を考えると、いささか少ないようにも受け取れる。少なくとも神奈川県と同数ぐらいの種が分布していると考えて良いので、山地性の種を中心にまだまだ未記録の種が存在するはずである。本稿では県内未記録のヒラタゴミムシ類を新たに追加して埼玉県のヒラタゴミムシ相、さらには歩行虫相全体の解明に資すると共に、知見、記録の少ない種等についても紹介したい。なお、タイトルに(1)と付けたからには当然続きがあるのだが、これは県内で既に採集されているヒラタゴミムシ類の中に♀個体のみ得られている種があり、分布上未記載種の可能性もあるので♂個体の交尾器形状を確認しないと公表できないためである。こうした種類については採集出来次第公表して行きたいと思う。

本稿作成にあたり貴重な標本を恵みいただいた東京農業大学昆虫分類研究室の新井志保氏、ホソヒラタゴミムシ属について御教示いただいた品川区の森田誠司氏に厚く御礼申し上げる。

なお本文中の既知産地説明は埼玉県昆虫誌 III にもとづくが、必要と思われる場合を除き、その都度引用は入れていないのであらかじめ明記しておく。

2. 県内初記録種

・*Synuchus silvester* (HABU, 1955) ナガクロツヤヒラタゴミムシ (図1)

肩部が強く前方に突出し、前胸背板が幅広いことで他の種とは容易に識別される。標高1,000mぐらいまでの山地に多く見られる種で、沢沿いの石下やガレ場の地中より得られる。県内ではこれまで3個体得られているが、いずれもの場所でも1例のみで追加個体は得られなかったことから、本来の生息環境と若干異なるか或いは個体密度の低い種と思われる。*Synuchus* 属の種の多くは落葉下に生息するが、本種の場合も沢の周囲に広がる天然林が本種の本来の生息場所なのであろうか。今後さらなる追加記録が待たれる。

【採集記録】

1♂, 20.VI.1998, 名栗村上名栗妻坂峠, 標高550m付近, 新井志保採集, 筆者保管.

1♂, 28.VI.1998, 荒川村川浦溪谷, 標高1,000m付近, 新井志保採集, 筆者保管.

1♀, 6.VIII.1998, 横瀬町芦ヶ久保大野峠, 標高880m付近, 筆者採集, 保管.

3. 既知種の追加記録

・*Platynus quadriimpressus* (DE GEER, 1774) ヨツボシヒラタゴミムシ (図2)

背面の微細彫刻による光沢が特徴的な小型種で、上翅第3間室の孔点が和名の由来である。県内では埼玉県動物誌の名栗村白岩と大滝村三峰山の2例が知られるのみで、以後記録がないようである。このたび得られたのは秩父市の名栗村境に近い有間山付近を通る林道である。周囲はブナ等が生育する良好な自然林で、林道はこの斜面を片側切通しにしてつくられており現在はアスファルト舗装されている。採集時は砂利敷きの状態であったが、この林道脇に溜まった落ち葉中より見出された。

【採集記録】

2♀♀, 5.VI.1999, 秩父市浦山有間山, 標高1,200m付近, 新井志保及び筆者採集, 筆者保管.

・ *Colpodes kyushuensis hondonus* (HABU, 1954) チャイロホソモリヒラタゴミムシ

本州亜種 (図3)

県内では北川辺町、小鹿野町及び秩父市裏山の3例が知られているのみ。本種はガレ場や岩盤の隙間に好んで生息し、地下生活に適応しつつある種のようなものである。後翅の発達具合も様々で個体変異が大きいのが、灯火にも飛来するので飛翔能力のある個体も多いものと思われる。まとまって得られることは少ないが、道脇のU字型側溝をさらって得られることも良くあるので、こまめに採集していれば記録も増えるであろう。山地沿いに分布する。

【採集記録】

- 1 ♀, 29.IV.1997, 荒川村川浦溪谷, 標高1,300m付近, 筆者採集, 保管.
- 1 ♀, 26.IV.1998, 秩父市上影森橋立川流域, 標高450m付近, 筆者採集, 保管.
- 1 ♀, 19.VII.1998, 東秩父村白石旧定峰峠, 標高600m付近, 筆者採集, 保管.
- 1 ♂ 1 ♀, 5.VI.1999, 秩父市浦山有間山, 標高1,200m付近, 筆者採集, 保管.
- 1 ♀, 15.VII.1999, 東秩父村安戸, 標高140m付近 (灯火), 筆者採集, 保管.

・ *Synuchus atricolor* (BATES, 1883) ホソツヤヒラタゴミムシ (図4)

最も標高の低い丘陵地の記録は毛呂山町、後は秩父方面で得られているが少ない。大型の個体では体長15mmに達し、県内で知られる *Synuchus* 属の種では *S. nitidus* オオクロツヤヒラタゴミムシに次いで大きい。肩部は丸く後翅は退化しているものと思われるが、爪部の形態は樹上性アトキリゴミムシ類に見られるような鋸刃状で、樹上生活にもある程度適応していることをうかがわせる。これは落葉下に生息する種の多い本属のなかでは特異である。筆者がこれまで採集した例はすべて樹液もしくは糖蜜トラップに集まってきたものであり、木の幹の地表から1~2mくらいのところで得られている。また夜間活発に動き回るようで、樹液に集まる他の昆虫類を捕らえているものと考えられる。

【採集記録】

- 1 ♂, 6.VIII.1998, 横瀬町芦ヶ久保大野峠, 標高880m付近, 筆者採集, 保管.
- 2 ♀ ♀, 15.VII.1999, 東秩父村坂本秩父高原牧場, 標高600m付近, 筆者採集, 保管.
- 1 ♀, 6.VII.2000, 同所, 筆者採集, 保管.

・ *Trephionus shibataianus* HABU, 1978 シバタホソヒラタゴミムシ (図5)

関東、中部の山地に分布し、ガレ場の地中や道脇の石下等にて採集される。県内では荒川村熊倉山と嵐山町塩山の2例が知られているのみで、採集しにくい種である。本種は秩父山地のかかなり低標高地でも得られ、ブナ林の林床や沢沿いのガレ場を主な生息地としているようである。ベイトトラップでも落ちるが、石起こし等での採集により得られることが多い。やや茶色がかった小型のヒラタゴミムシで *Synuchus* 属の一種と勘違いされがちであるが、山地での採集の際には注意されたい。

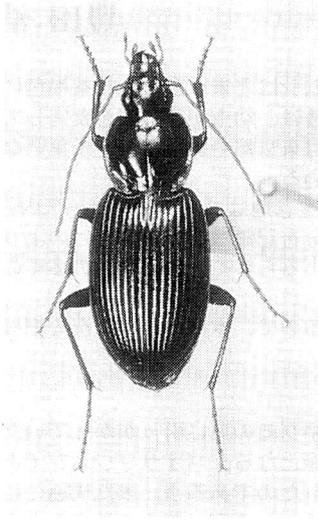
既知記録のうち嵐山町塩山 (豊田, 1998) のものはメス個体での同定でやや疑問であり、第5符節上の過剰刺毛が5本近く認められるあたりはむしろ *T. kinoshitai* シロウマホソヒラタゴミムシに近い形質である。しかしながらこの形質は個体変異が大きく種の判別にはあまり有効でないようである (森田氏私信)、単なる変異の可能性もある。また、この個体は前胸背板側縁には後角または波曲は認められず、直線状に近い状態であることからあるいは未記載種の可能性もある。雄個体の追加が待たれるが、現在のところ得られていない。

【採集記録】

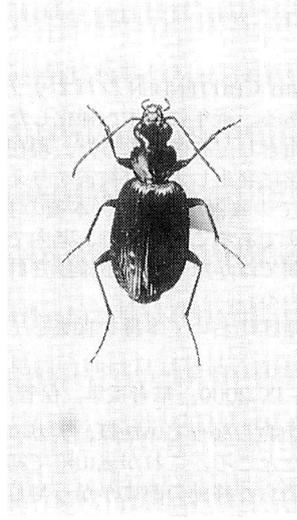
- 1 ♀, 27.IX.1997, 大滝村霧藻ヶ峰地蔵峠, 標高1,400m付近, 筆者採集, 保管.
- 1 ♂ 1 ♀, 20.VI.1998, 名栗村上名栗妻坂峠標高550m付近, 新井志保及び筆者採集, 筆者保管.
- 2 ♀ ♀, 27.VI.1998, 東秩父村白石峠, 標高700m付近, 筆者採集, 保管.
- 1 ♂, 28.VI.1998, 荒川村川浦溪谷, 標高1,000m付近, 筆者採集, 保管.

4. 引用文献

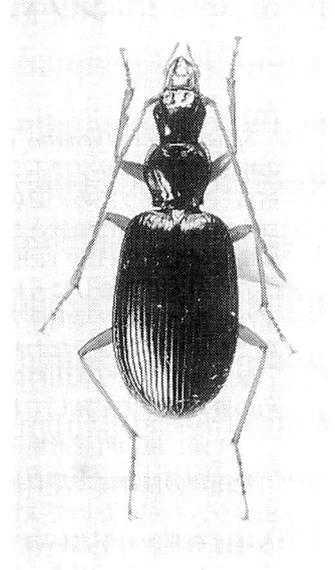
- 平野幸彦編, 1998. 神奈川県産甲虫類目録. 神奈川虫報, 特別号2: 35-124. 神奈川昆虫談話会.
- 笠原須磨生, 1999. 千葉県産の歩行虫. 千葉県動物誌, pp.496-545. 千葉県生物学会編.
- 高野勉・大桃定洋, 2000. 茨城県産甲虫リスト. るりぼし, (23): 1-156. 水戸昆虫研究会.
- 斎藤良夫, 1978. 埼玉県の甲虫. 埼玉県動物誌, pp.213-258. 埼玉県教育委員会.
- 豊田浩二, 1998. 嵐山町の甲虫類 (中間報告). 嵐山町博物誌調査報告, (3), pp.35-46. 嵐山町教育委員会.
- 吉越肇他, 1998. 埼玉県の鞘翅目 (甲虫類). 埼玉県昆虫誌III, pp.93-340. 埼玉昆虫談話会.



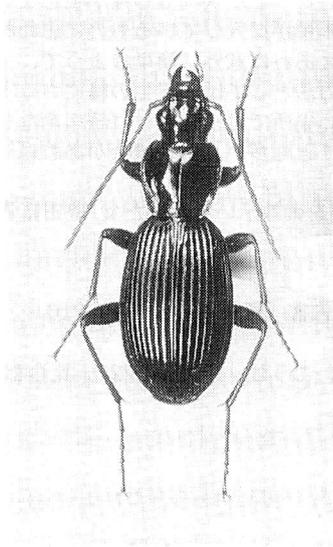
1



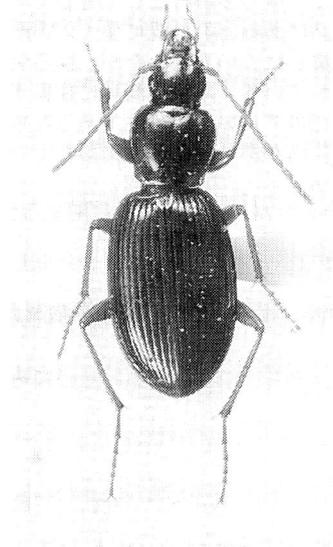
2



3



4



5

- 1. *Synuchus silvester* ナガクロツヤヒラタゴミムシ
- 2. *Platynus quadriimpressus* ヨツボシヒラタゴミシ
- 3. *Colpodes kyushuensis hondonus* チャイロホソモリヒラタゴミムシ 本州亜種
- 4. *Synuchus atricolor* ホソツヤヒラタゴミムシ
- 5. *Trepionus shibataianus* シバタホソヒラタゴミムシ

(とよだ こうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686)

シバオサゾウムシを嵐山町で確認

豊田 浩二

Sphenophorus venatus vestitus CHITTENDEN シバオサゾウムシは北米原産の全身茶褐色に灰色の粉を帯びたオサゾウムシである。近年に日本へ帰化した本種は、幼虫が芝の根を食害して芝生を枯らしてしまうため、芝の害虫として有名になった。現在では東京都や神奈川県、千葉県などで、ゴルフ場や公園に植栽された芝に発生し大きな被害を与えている。

埼玉県でも川口市（1995）での報告があるが、本種の主な生息地はゴルフ場のコース内といった、一般人が調査しにくい場所であることも有り、県内での分布記録はこの一例だけのようなのである。また本種はゴルフ場関係者の間ではかなり前から確認されているらしく、現に県内の多くのゴルフ場で本種の駆除が行なわれている。

筆者はこのたび嵐山町鎌形地区において本種を採集しているので、本種の分布状況を把握するための資料として記録しておく。

1頭、嵐山町鎌形塩沢, 1.IX.2000, 筆者採集, 保管。

廃田跡の湿地にて写真撮影をおこなっていた際、ナガコガネグモの巣に引っかかっていた見なれぬゾウムシがいたので採集したところ、これが嵐山町で初記録となるシバオサゾウムシであった。本種は飛翔能力が高いので、恐らく移動の際にかかってしまったのであろう。また周囲には道脇にほんのちょっと芝がある程度で、ここに発生しているものと思われるが、周辺の地形から考えて恐らく都幾川河川敷の芝生沿いに移動してきたものと考えられる。

嵐山町内のゴルフ場でも本種は発生しているらしく、芝関係の仕事をしている筆者の父によれば、県内の河川沿いにあるゴルフ場はほとんど被害にあっているとのことである。また、県内では特に小川町にあるゴルフ場のひとつで本種が多く発生しているらしく、3～4年前から発生していて被害も大きいようである。嵐山町を含む比企丘陵周辺にはゴルフ場が隣接しており、鳩山町などは全国で最もゴルフ場の多い町として有名である。こうした状況は本種が生息するには絶好の条件であり、前述の話にあるとおり既に多くの場所に本種が進入しているものと思われる。

本種は採集しにくいと書いたが、採る気さえあれば意外に簡単なようで、アセスメント調査等でも良く得られている。本種を簡単に採集する方法としては、芝生の縁にカップを埋めてしばらく放置しておくだけで良い。夜行性であるため多い場所では一晩置けば誘引剤なしでも落ちている。周囲にU字型側溝があればこの中に落ちていることも多い。もし機会があればぜひ試してみたいかであろうか。

末筆ながら、シバオサゾウムシに関する情報を御教示いただいた父、豊田富貴氏に御礼申し上げる。

引用文献

川口市, 1995. 平成6年度川口市動物調査報告書. 資料集, pp.199-210.

(とよだ こうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686)

埼玉県の甲虫類に関する覚書（その2）

豊田 浩二

日高市の教育委員会が自治体史編さんのために行なった生物相の調査は、1991年に『日高町史 自然史編』としてその成果が公表された。この町史は一般向けの内容であることもあって、具体的なデータは掲載されていない。したがって専門的な内容については別冊の形で、自然史編の『調査概要報告』や『調査記録集』といったものが発行された。この中で甲虫類については残念ながら目録の具体的なデータが公表されていないようであるが、甲虫類の記録が全く出ていないわけではない。実はこの2冊のうち『調査記録集』の中には水生動物の調査結果が掲載されており、このなか

に鞘翅目として7種類が挙げられているのだ。

種類が挙げられているといっても、甲虫類で種レベルまで同定されたものが掲載されているものは2種類であり、調査地の記号とそれぞれの種の個体数が表になっているだけの内容である。具体的な場所や記録年月日は勿論この表を見た限りではわからない。

さて、ここで問題になってくるのがここに掲載された種のうちのいくつかである。アシナガドROMシ科として挙げられている2種類があるが、ひとつは“*Helichus* sp. HC”であり、もう一つは“アシナガドROMシ”である。はて？アシナガドROMシ科とは何であろうか。本邦から知られている、いわゆるドROMシと名の付く既知の甲虫類はヒラタドROMシ科 Psephenidae、チビドROMシ科 Limnichidae、ナガドROMシ科 Heteroceridae、ドROMシ科 Dryopidae、ヒメドROMシ科 Elmidae のうちのいずれかに属しているはずである。表の中ではヒラタドROMシ科及びナガドROMシ科は別に挙げられているので、残る3つのうちのどれかということになる。*Helichus* 属の種が属しているということはドROMシ科だろうか。しかしながら *Helichus* 属で本邦から知られているのは *Helichus hasegawai* ハセガワドROMシただ一種のみであり、これは北海道に分布する種である。もう一つのアシナガドROMシだが、こういう和名の種類は知らない。似たような名前でアシナガミゾドROMシ *Stenelmis vulgaris* がいるが、もしこの種を指しているのならばヒメドROMシ科という事になる。たしかにドROMシ科とは形態的にも良く似ているし、“*Helichus* sp. HC”はヒメドROMシ科の一種の誤同定と判断するのが自然なように思える。

ちなみに“アシナガドROMシ”がアシナガミゾドROMシ *Stenelmis vulgaris* だとすると、これは県内初記録種ということになる。いずれにせよヒメドROMシ科と思われる種が2種類も得られているということは、日高市の水生生物相が豊かであることの証明にもつながる。

余談ではあるが、“*Helichus* sp. HC”の“HC”とは何であろうか。水生生物の調査をされている方々は良く未同定の種を記録する際に“HB”とか“PA”とか、DA、Aa、EA、EC等々、実に様々な記号(?)をくっつけている。筆者はこの決まり事の意味を知らないのであまり余計なことを書くとも墓穴を掘ることになるが、少なくとも動物類の二命名方にはこのような決まり事はないものと記憶している。おそらく指標生物としての記号か何かなのであろう。もしこうした記号を便宜上付けるのであれば、きちんと凡例も付けていただけると読むときに意味が理解できて良いのである。

話を元に戻すが、このほかにナガドROMシ科として“ナガドROMシの一種”というのが挙げられている。県内ではこの科に属する種としてタテスジナガドROMシ *Heterocerus fenestratus* が平野部を中心に記録されているが、もし別の種であればもちろん県内初記録種である。ただしこの仲間はいずれも良く似ていて同定が難しいので、ナガドROMシの一種という扱いは妥当とも言える。

甲虫類の文献記録をひろってゆくとときにいつも忘れがちなのが、この『水生生物』の目録である。また、これらの目録には決まって“不明種”が掲載されている。水生生物の調査をされている方にとっては、甲虫類はいわゆる「外道」である。したがって、いちいち同定していないのであろう。地域の甲虫相を研究している側からすれば、この“不明種”は極めてやっかいであるが、だからといって甲虫類の記録であることには間違いなく、無視することはできない。願わくば、水生生物の調査を担当される機会のある方は、目録を作成する際にカゲロウやカワゲラといった中心的な役割をはたすグループ意外の仲間でも同定が困難なものは、それぞれの専門家に同定を依頼するなどしていただければと思う。そうすることで県内の生物相はより良い形で解明が進むであろう。

引用文献

大川戸 浩, 1992. 水生動物河川調査結果. 日高町史自然史編 調査記録集, pp.94-99. 埼玉県日高市.

(とよだ こうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686)

名栗村、荒川村、両神村で メスアカミドリシジミを採集

石塚 正彦

筆者はメスアカミドリシジミ (*Chrysozephyrus smaragdinus*) を名栗村、荒川村、および両神村で採集、採卵しているので報告する。

● 名栗村

有間山の東山麓は以外と植林地が少なく、上部にはミズナラも沢山自生し、ゼフィルスには良い環境が残っている。筆者はこの地で数年前より、アイノミドリの越冬卵調査をしていたが、秩父側では以前報告したように成虫確認はできたが、名栗村側では確認できていない。そこで、今年は越冬卵調査から成虫調査へと変更した。なぜかという、秩父地方においては、これらゼフィルスの成虫採集は難しいとされていた。また、筆者も難しいと思っていた。そのため越冬卵調査が中心であった。しかし、数年前より発生時期と天気うまく当たれば奥秩父でもアイノ、メスアカ、エゾミドリが一日の間に各々、二桁近い観察が可能であることが分かってきたからである。

今回のメインの調査はアイノミドリである。秩父市内の自宅を7:00に出発し、7:45には有間山麓東斜面alt850m付近に到着し、標高をある程度守りながら朝陽の入り込む谷筋をひとつひとつ調査した。日中、以外と良い環境に見えても、朝陽の差し込む谷は少なく、結局二つの谷を時間において交互にみることになった。そして8:10最初のエメラルドグリーンが光った。時間帯から言ってみればアイノだろうと思って採集するとなんと、メスアカミドリである。その後15分程何も出なかったの隣の沢へ転戦する。しかし、そこでは、それらしきエメラルドグリーンが一瞬光ったが、その後が続かず、また、先程の谷へ戻ることにした。8:45谷の奥の方で光ったのが見えたので、沢を詰めることにした。そして9:00頃だろうか一頭テリトリーを張っているのを採集する。これもアイノではなく、メスアカであった。その後、また10m程入ったところで二頭飛翔しているのを採集する。結局、その後、雲が出て来て天候が悪くなり、本日の採集は終了となる。目的のアイノは採集できなかった。

しかし、今回の調査でメスアカが8:10頃からテリトリーを張っているのには驚いた。筆者の奥秩父の経験では通常アイノミドリは10:00前にテリトリーを終了し、これに入れ替わるようにメスアカがテリトリーを始めるのである。と言うことは、ここ名栗村はアイノミドリがいないのでメスアカが早くからテリトリーを張るのだろうか？

データ：入間郡名栗村下名栗栃の木入沢alt850m 2000年7月2日 4♂ 筆者採集保管

● 荒川村

ここ川浦谷は、今回2回目の越冬卵調査で、目的の蝶はフジミドリの卵採集であった。1回目来たときから、良い環境（陽当たりの悪い谷筋）に桜の木が植えてあったので、これは居ても、おかしくないなと考えていた場所である。

データ：秩父郡荒川村安谷川上流alt600m 1998年12月19日 5卵

飼育経過：1999年5月3日 3♀羽化 1999年5月6日 1♀羽化

● 両神村

ここ日向大谷も前から桜の幼木があるのは知っていたが陽当たりが良すぎるので難しいと考えていた場所であるが毎回来る度には、覗いていた場所である。そして3年目の今日採卵に成功した。

データ：秩父郡両神村薄日向大谷alt550m 1999年12月29日 5卵

飼育経過：2000年5月1日 2♂羽化 2000年5月2日 1♂羽化 2000年5月7日 1♀羽化

ミヤマチャバネセセリの幼虫を採集

石塚 正彦

筆者は、ミヤマチャバネセセリ(*Pelopidas jansonis*)の幼虫を採集したので報告する。

秩父槍ヶ岳と言う山を御存知だろうか、大滝村を中津川方面に向い、建設中の滝沢ダムを過ぎると、渓谷沿いの細い道となる。途中、中双里のところで急に視界が開けた時、左前方に見える、やや両神山に似た、岩肌の多く見える、険しそうな山が秩父槍ヶ岳である。位置的には、ちょうど中津川集落と、この中双里の間にそびえ立ち、中津川集落にクロツが居て、この中双里手前の塩沢にクロツが居て、その中間にある赤く見える岩肌の多い、この秩父槍ヶ岳にクロツが居ないはずがない。と言うことで9/30調査決行となった。中双里で車を一端止め、今日目指す岩場を決める。そして目測より仏石山トンネルの手前車を止め、方向を間違えないように、道なき道を進み、目的の岩場を目指す。そして1時間30分後、目的の岩場に到着する。環境は問題ない、しかし肝心のツメレンゲが見つからない。30分近く付近を探すが見つからない。わずかにマルバマンネングサはあったが、喰痕幼虫、卵も見つからない。結局太陽の位置等を考えると岩場の向きが東向きで、地形から見て日照時間も短そうなのが原因ではなかろうかと、こじつけ、下山した。帰り道、収穫ゼロでは寂しいので、何かないかと見てみると、中双里の開けた道端にススキの株が幾つか見えた。早速車を止め、覗いてみると、あるわ、あるわ、セセリの喰痕、結局7つの幼虫を採集した。採集した幼虫は2令～終令と各ステージの幼虫が採集できた。確かに中令、終令はミヤマチャバネの幼虫である。では、これら2令の幼虫は何だろう……と思いながら、自宅へ向かった。

自宅で飼育してみると、あら不思議すべてミヤマチャバネの幼虫であった。筆者の推測では、この中双里周辺は、ミヤマチャバネの年1化、2化発生の中間的位置にあり、今回採集した幼虫は若令の幼虫は2化目の親によるものであり、中、終令幼虫は1化の親によるものではなかろうか？

データ : 秩父郡大滝村中双里 2000年9月30日 7 幼虫採集

(次ページへ続く)

秩父市定峰でクジャクチョウを目撃

喜多 英人

筆者は、2000年7月1日に秩父市定峰(MC: 5439-01-21, 標高約300m)で、クジャクチョウ *Inachis io geisha* (STICHEL, 1908) を目撃し、写真撮影をした。

この個体は、舗装道路脇のコンクリートの壁に静止し、口吻を伸ばしていたことから吸水をしていたものと思われる。他にもこのコンクリート壁で、4,5頭のテングチョウ *Libythea celtis celtoides* FRUHSTORFER, 1909 が、やはり吸水していたが、クジャクチョウはこの1頭だけであった。

比較的、低標高地の記録として報告する。文末ではあるが、発表を勧めていただいた碓井 徹氏に厚く御礼申し上げる。

参考文献

星野 ほか, 1998 埼玉県の鱗翅目(蝶類), pp. 287-386, 埼玉県昆虫誌 1

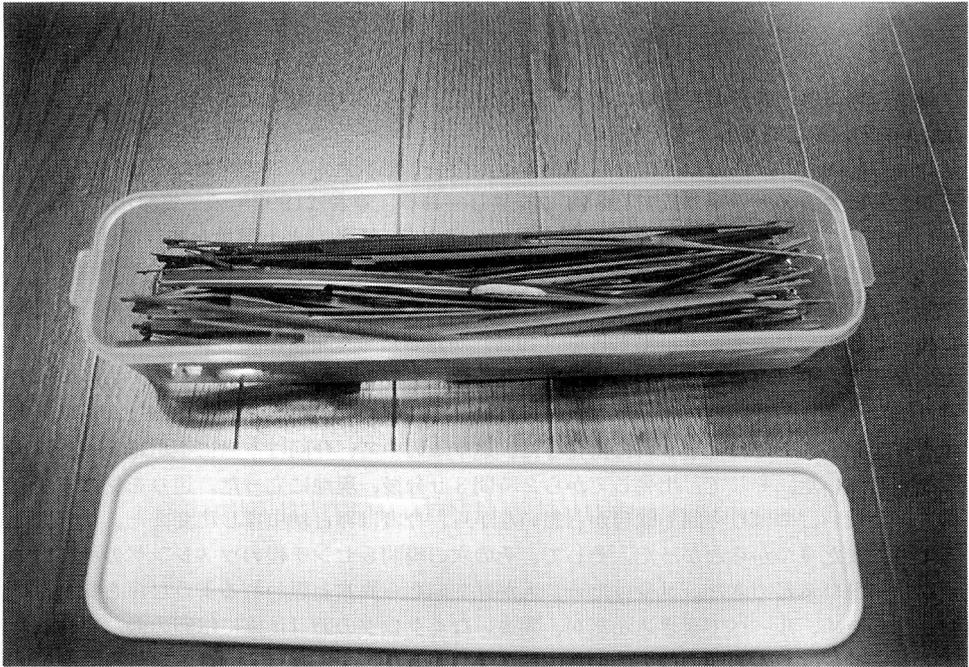
(きた ひでと 〒203-0033 東久留米市滝山6-2-15-308)



中双里の集落より秩父槍ヶ岳を望む 2000年9月30日撮影



中双里の集落付近 2000年9月30日撮影



飼育中のミヤマチャバネセセリ幼虫



蛹化したミヤマチャバネセセリ

念願叶う alt 1800mのクロツバメシジミ

石塚 正彦

筆者は埼玉県と長野県の県境にある三国峠付近（標高1800m超）でクロツバメシジミ(*Tongeia fischeri*)の幼虫を採集したので報告する。

寄せ蛾記(93)：「秩父のクロツバメシジミ」で少し触れたが、この場所は三国峠に程近く、オリジナルは会員の笠原隆二氏で1984年に採集しており、筆者は1992年頃、笠原氏より、この情報をいただき、1993年より毎年2～3回、いつか発生するだろうと、同地を訪れ続けた。そして2000年の9月やっと念願叶い発生が確認できた。

個人的な話で申し訳ないが、今年は7月に父が亡くなり、当然ではあるが、一番良い時期に採集に出られなかった。そして、七七日忌(49日)が過ぎたら採集に出ても良いだろうと勝手に考えていた。その頃になるとゼフの母蝶採集も終わり、クロツしかないなあと思い、毎年恒例の今年こそクロツが発生しているだろうと、だまされ続けている、三国峠行きに決まった。愛車550cc2サイクルのジムニーで自宅を9時に出発した。途中車の中で、今回は本当に不思議と今日は採れそうな気がしていた。そして、出発してから2時間30分後、現地に立った。辺りを見渡すがクロツは飛んでいない。やはり今回も駄目かと思いながら、今度は卵と幼虫探しに変えた。半分探したところでは、まだ見つからなかった。そして、その次の瞬間5センチ程のツメレンゲの穂に白い小さな点が目に飛び込んできた。「やったー」人が見ていたら異常と思われるような声を張り上げてしまった。念のため、ルーペで覗き込んだが、間違いなくクロツの卵（正確には卵の殻）であった。そして、最終的には6本の卵の殻のついた。穂が見つかった。全部採って行きたい気持ちを抑え（心の悪魔は、ツメレンゲの穂は今年の方は枯れて終わりだから全部採っても大丈夫だよ、他のツメレンゲの穂にも卵の殻は付いていなくとも、それは既に1令幼虫が忍び込んでいて卵の殻は外れているだけだから大丈夫だよ）、半分の3本と思ったが、手には4本のツメレンゲの穂をしっかりと握っていた。

そして、家に持ち帰りホットカーペットの上で飼育し、10/25～11/18にかけて、16頭のクロツが羽化した。

P. S

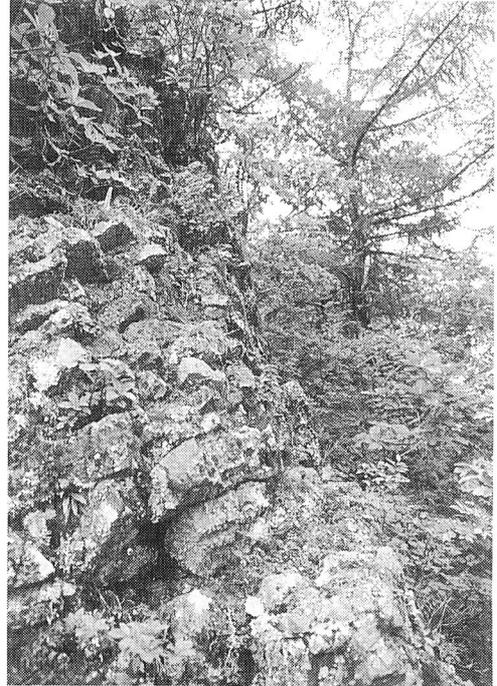
(1994年頃？秩父の植物を調査されている方より、直接お聞きした話で、長野、埼玉県境にある梓白岩山alt1853mにツメレンゲがあるとの情報をいただき調査したことがある。しかし、その時はツメレンゲを発見できなかった。確かに岩山であったが、石灰岩質のような岩で、少しクロツの環境とは違うなあと思った。再度お会いするチャンスがあったら、もう少し詳しくお聞きしようと考えている。)

採集データ：埼玉県秩父郡大滝村三国峠付近 alt1800m 2000年9月24日 16幼採集

飼育データ：2000年10月25日～11月18日 16頭羽化



標高1800mのクロツ生息地 2000. 9. 24撮影



標高1800mのクロツ生息地 2000. 9. 24撮影



標高1800mに咲くツメレンゲの穂 2000. 9. 24撮影

12月10日のクロツバメシジミ

石塚 正彦

筆者はクロツバメシジミ (*Tongeia fischeri*) が晩秋いつ頃まで活動しているのか、昨年 (1999年) より観察を始めた。それまでは、秩父地方におけるクロツバメは10月下旬から11月上旬が最後のピークと考え、遅くとも、11月20日には姿を消すと考えていた。しかし、クロツの生息地は南向きの陽当たりの良い岩場、温度も上昇する。また、飼育品のクロツなどを羽化後、取り込むため、冷蔵庫に入れ、動きが鈍ったところを三角紙に入れているが、その時の様子を見ていると、クロツは他の蝶に比べ寒さに強いと感じていたのも、もしかしたら、12月まで生き残るのではないかと考えた。

そして、観察地として選んだ小鹿野町の合角はツメレンゲ、個体数、環境が最も整った場所である。さて観察結果は……

月/日	11/5	11/11	11/13	11/18	11/20	11/25	11/26	11/27	12/9	12/10	12/11	12/16
1999年 (合角)	—	—	5	—	4	—	—	3	—	—	0 ^{*1}	—
(久長)	—	—	0	—	0	—	—	—	—	—	—	—
2000年 (合角)	4	6	—	4	—	0 ^{*2}	4	—	2	2	—	0 ^{*3}
(久長)	1	—	—	3	—	1 ^{*2}	—	—	—	—	—	—

数字：観察数 —：調査無

※1……この日は北風が強く低温であった。

※2……この日は北風が強く低温であったが、久長については叩き出して1頭観察した。合角については、アプローチできないので、叩き出しはできない。

※3……この日は南風が吹き、11月上旬の気温となったが、風が強かったのか、もう既に終わっているのか分からないが確認できなかった。しかし、まだ幾つか、ツメレンゲの白い花は残っていた。

観察地 (合角)： 秩父郡小鹿野町大字日尾合角
(久長)： 秩父郡吉田町久長

上記のような結果になった。秩父地方は11月になれば、霜が降り、12月になれば氷点下になり氷も張る。また12月も10日になれば広葉樹の葉も落ち、ツメレンゲの穂も先端にわずか白い小さな花を残すだけで下の方は枯れている。その蜜を吸いながら飛んでいるクロツを見ていると感動さえ覚える。秩父地方で成虫越冬を除く種で、最も遅くまで見られるのはクロツバメかもしれない。

(いしづか まさひこ 〒368-0035 秩父市上町1-1-17)

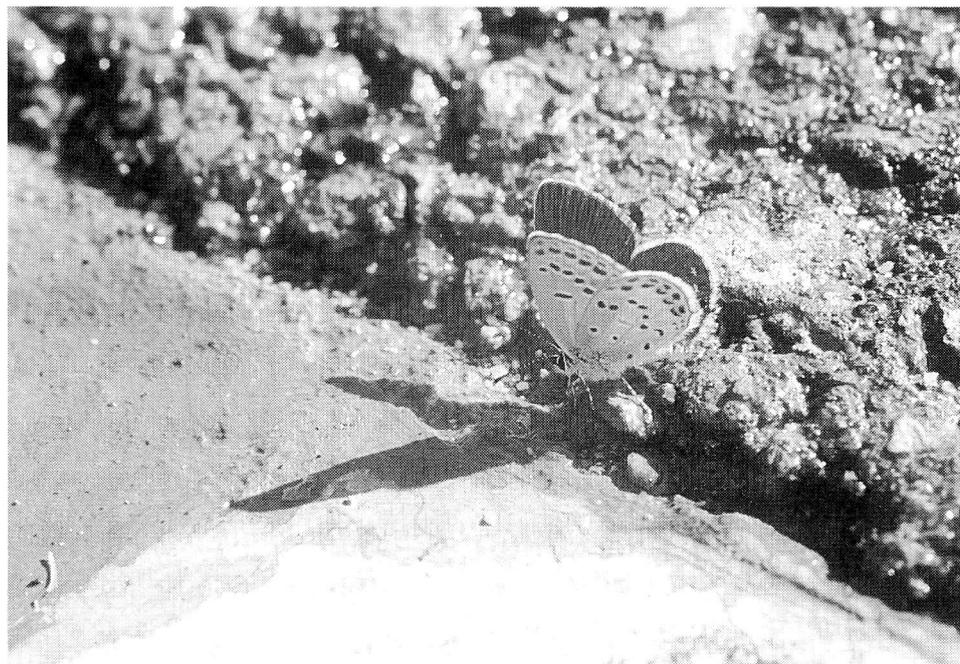
クロツバメシジミの吸水

石塚 正彦

筆者はクロツバメシジミ (*Tongeia fischeri*) の吸水行動を観察したので報告する。クロツバメシジミの発生状況を確認するため、同地を訪れた際、クロツ発生地崖より約3m離れた道路端に水が滲んでいる場所があり、そこでクロツが吸水していた。最初は全く気付かず、崖のクロツを観察していたが、足元で黒いものがチラチラしていたので、よく見るとクロツであり、筆者が邪魔をしているにもかかわらず、このクロツは足元付近に執着しているので、もしかしたらと思

い、少し離れて観察していると、道路よりしみ出した水で吸水を始めた。筆者が写真を撮るためにクロツに近寄りすぎて、驚かしても直ぐに戻ってきて吸水を始めるなど、かなり執着しているようであった（写真参照）。

データ：秩父郡小鹿野町日尾合角 2000年11月5日 吸水中の1頭観察



ムラサキツバメを岩槻市で発見

菊川 和男・牧林 功

岩槻市においてムラサキツバメの複数個体を確認したので報告する。筆者の一人菊川は2000年11月18日14:00頃、岩槻市太田の岩槻公園で、至近距離に止まったムラサキツバメ♀を発見し撮影した(図1)。新鮮な個体であった。その個体はシロダモの花に飛来し(図2)、吸蜜した。また1週間後の11月25日にも、同地において3個体の飛翔を目撃した。この事実から、これらの個体は同地において発生した個体であると考えられる。

ムラサキツバメは今年に入って、神奈川県小田原市、南足柄市、茅ヶ崎市、寒川町、藤沢市、三浦市、横須賀市、横浜市金沢区、磯子区、東京都千代田区、江東区、渋谷区、千葉県千倉町、富津町、袖浦市、千葉市、習志野市、我孫子市で記録され、埼玉県内でも草加市で確認されている(図3)。

これらの記録から今年、関東地方南部で広範囲に発生したと考えられ、おそらく昨年以前に関東南部のいずこかに侵入し、それが拡大したものと推察できる。

植樹のマテバシイは公園や街路樹等、管理された場所に多く植栽されているので、冬の気温の如何によっては越冬が可能であろう。

多くの方々に来春以降の発生地での再確認をお願いすると共に、気候の温暖化による北上にも十分注意をお願いしたい。恐らく来年は埼玉県各地で目撃されるようになると思われる。それはクロコノマチョウ、シロヘリクテプトカメムシの分布拡大と規を一にした現象となるであろう。

小文を書くにあたり御教示いただいた芦沢一郎、大塚市郎、大島良美、岸一弘、松田邦雄の各氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 神部正博 (2000) ムラサキツバメを草加市で確認。寄せ蛾記(97):2954。
 小平百恵 (2000) 皇居周辺に珍チョウ。毎日新聞夕刊10月14日付。
 松田邦雄他 (2000) ムラサキツバメが東京都心で発生。月刊むし(357):42



図3. 2000年、関東地方でのムラサキツバメの記録地。



図1. 岩槻市のムラサキツバメ♀ (菊川和男撮影)



図2. シロダモの花に飛来したムラサキツバメ♀ (菊川和男撮影)

(きくかわ かずお 〒339-0058 岩槻市本丸3-2-4)

(まきばやし いさお 〒330-0834 大宮市天沼町2-864)

埼玉県産蝶類記録 (8)

中川 利勝

筆者は、1999年～2000年までの埼玉県内の蝶類採集記録を整理したので報告する。以下報告する記録は、筆者自身の明確な記載のある記録（目撃記録を含む）、および現存する標本データのみを採用している。

尚、筆者の『埼玉県産蝶類記録（4）』の中で、クロシジミの記載漏れがあったので、末尾に1991年採集記録として、クロシジミを追加し補足しておく。

◎ セセリチョウ科

ダイミョウセセリ	09. V. 1999	川口市東内野	2exs.
	15. VII. 2000	狭山市堀兼	1ex.
ヒメキマダラセセリ	28. V. 2000	入間市宮寺	3exs.
キマダラセセリ	08. VIII. 1999	川口市東内野	1 ♀
	08. VIII. 1999	川口市東内野	2exs. 目撃
	08. VIII. 1999	浦和市間宮	2 ♂♂
	12. VIII. 1999	浦和市間宮	2 ♂♂
イチモンジセセリ	01. IX. 1999	浦和市南部領辻	4 ♂♂
ミヤマチャバネセセリ	29. VIII. 1999	浦和市下山口新田	1 ♂
コチャバネセセリ	20. VII. 1999	入間市宮寺	4 ♂♂(夏型)
	20. VII. 2000	浦和市南部領辻	1 ♀(夏型)
ホソバセセリ	15. VII. 2000	狭山市堀兼	7exs.

◎ アゲハチョウ科

ジャコウアゲハ	09. V. 1999	川口市東内野	1 ♂
	09. V. 1999	浦和市間宮	1 ♂
	09. V. 1999	浦和市間宮	2 ♂♂目撃
	09. V. 1999	浦和市大崎	2 ♂♂目撃
	11. IX. 1999	浦和市大崎	1 ♀(夏型)目撃
	13. IX. 1999	浦和市大間木	1 ♀(夏型)目撃
	04. VI. 2000	浦和市南部領辻	1 ♂目撃
	04. VI. 2000	浦和市大崎	1 ♀目撃
カラスアゲハ	09. V. 1999	川口市東内野	1 ♂(春型)
	26. VI. 1999	川口市東内野	2 ♂♂(夏型)目撃 5 幼(3齢×2,2齢×1, 1齢×1) (食樹:イサノソウ)
	08. VIII. 1999	川口市東内野	1 ♂(夏型)
	08. VIII. 1999	浦和市間宮	1 ♂(夏型)目撃
	08. VIII. 1999	浦和市南部領辻	3 ♂♂(夏型)目撃
	29. VIII. 1999	浦和市大崎	1 ♀(夏型)目撃 (カラギに産卵)
	29. VIII. 1999	浦和市上野田	1 ♀(夏型)目撃

◎ シロチョウ科

モンシロチョウ	14. III. 1999	浦和市下山口新田	1 ♂目撃
	14. III. 1999	浦和市南部領辻	1 ♂目撃
	07. III. 2000	浦和市大間木	1 ♀1 ♂目撃 (初見日)
モンキチョウ	14. III. 1999	浦和市下山口新田	4 ♂♂目撃
	07. III. 2000	浦和市大間木	1 ♂

◎ シジミチョウ科

ムラサキシジミ

08. VIII. 1999 川口市東内野 3 ♀♀
12. VIII. 1999 浦和市間宮 1 ♂

アカシジミ

05. XII. 1999 川口市東内野 1 ♀ 目撃
22. V. 1999 所沢市堀之内 3exs.
22. V. 1999 入間市宮寺 1ex.
23. V. 1999 浦和市間宮 1ex. 目撃
23. V. 1999 入間市宮寺 2exs.
26. V. 1999 浦和市間宮 1 ♂
26. V. 1999 浦和市間宮 1ex. 目撃
08. VI. 1999 浦和市間宮 3exs. 目撃
08. VI. 1999 川口市東内野 1ex. 目撃
28. V. 2000 所沢市堀之内 1ex.
28. V. 2000 入間市宮寺 2exs.
03. VI. 2000 浦和市間宮 1ex. 目撃
04. VI. 2000 浦和市上野田 1 ♀ 4 ♂♂
30. V. 1999 川口市東内野 1ex.
03. VI. 1999 浦和市間宮 12exs.
03. VI. 2000 浦和市上野田 1 ♂ 目撃
04. VI. 2000 浦和市上野田 1ex.
04. VI. 2000 浦和市間宮 1ex.
04. VI. 2000 川口市東内野 2exs.

ミズイロオナガシジミ

オオミドリシジミ

18. I. 2000 比企郡嵐山町菅谷 1 卵(食樹;コナ)
23. I. 2000 比企郡吉見町黒岩 15卵(食樹;コナ)
23. I. 2000 比企郡吉見町和名 12卵(食樹;コナ)

ベニシジミ

ウラナミシジミ

14. III. 1999 浦和市南部領辻 1 ♂ 目撃
29. VIII. 1999 浦和市大崎 1 ♂
19. IX. 1999 川口市東内野 4 ♂♂
26. IX. 1999 川口市木曾呂 1 ♀ 1 ♂
24. IX. 2000 川口市差間 2 ♀♀ 1 ♂

クロツバメシジミ

02. X. 1999 秩父市黒谷 4exs. 10 卵(食草;ツルンゲ)
02. X. 1999 秩父郡吉田町上吉田 2 ♂♂ 1 蛹 14卵
(食草;ツルンゲ)
08. X. 2000 秩父市黒谷 1 幼(食草;ツルンゲ)
08. X. 2000 秩父郡吉田町上吉田 13卵(食草;ツルンゲ)
22. X. 2000 秩父市黒谷 4 卵(食草;ツルンゲ)

ゴイシシジミ

ヤマトシジミ

30. V. 1999 浦和市南部領辻 1 ♀ 3 ♂♂
08. VIII. 1999 浦和市南部領辻 1 ♀ 4 ♂♂
09. VII. 2000 浦和市上野田 1 ♀

◎ ウラギンシジミ科

ウラギンシジミ

12. VIII. 1999 浦和市間宮 1 ♀ (夏型)
29. VIII. 1999 浦和市大崎 1 ♂
20. VII. 2000 浦和市南部領辻 1 ♀ (夏型)

◎ タテハチョウ科

メスグロヒョウモン

ミドリヒョウモン

ウラギンヒョウモン

イチモンジチョウ

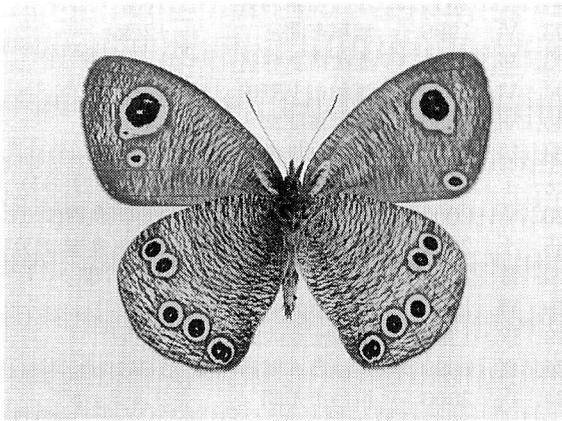
コムシジ

15. X. 2000 秩父郡皆野町養山 1 ♀
15. X. 2000 秩父郡皆野町養山 1 ♀
15. X. 2000 秩父郡皆野町養山 1 ♀
29. V. 1999 浦和市間宮 1ex.
09. V. 1999 浦和市南部領辻 1 ♀ 1 ♂
20. VII. 2000 浦和市南部領辻 1 ♀

キタテハ	14. III. 1999	浦和市下山口新田	2exs.(秋型) 目撃
	14. III. 1999	浦和市南部領辻	1ex.(秋型)目撃
	01. IX. 1999	川口市東内野	1 ♂
アカタテハ	29. VIII. 1999	浦和市大崎	2exs. 目撃
ヒメアカタテハ	13. XI. 1999	浦和市下山口新田	12幼(終齢,食草;珙杞)
ルリタテハ	12. IX. 1999	川口市東内野	5 幼(1齢,食草;サトリハナ)
コムラサキ	04. I. 1999	浦和市南部領辻	1 幼(食樹;シラヤナギ)
	04. IV. 1999	浦和市下山口新田	1 幼(食樹;ウリュウヤナギ)
	03. VI. 1999	浦和市間宮	1 ♂目撃
	08. VIII. 1999	浦和市下山口新田	2 ♀♀目撃
	05. XII. 1999	浦和市下山口新田	6 幼(食樹;ウリュウヤナギ)
	12. XII. 1999	川口市差間	1 幼確認(食樹;ウリュウヤナギ)
ゴマダラチョウ	20. VII. 2000	浦和市南部領辻	1 ♀

◎ ジャノメチョウ科

ヒメウラナミジャノメ	09. V. 1999	浦和市南部領辻	3 ♀♀17♂♂
------------	-------------	---------	----------



同日採集したうちの1個体
春型 ♂ 裏面

ジャノメチョウ	15. VII. 2000	狭山市堀兼	1 ♂
クロコノマチョウ	09. IX. 2000	川口市東内野	1 ♂(秋型)
	24. IX. 2000	浦和市間宮	1 ♂(夏型) 目撃
	24. IX. 2000	浦和市間宮	1 ♀(秋型) 目撃

※ 埼玉県産蝶類記録(4)の記載漏れ追加分

◎ シジミチョウ科

クロシジミ	06. VII. 1991	狭山市北入曾	7 ♀♀5 ♂♂
	07. VII. 1991	狭山市北入曾	1 ♂
	07. VII. 1991	狭山市北入曾	1 ♂目撃

《参考文献》

- 中川利勝 (1996) 埼玉県産蝶類記録(4), 寄せ蛾記(78): 2084~2086
 ——— (2000) ヒメウラナミジャノメの過剰紋, 蝶研フィールド6 通巻168号(2000): 7

蜻蛉の雄同士の連結行動

加納 一信

トンボの雄は性的衝動が高まると、異種間でも連結あるいは交尾まで至り、その観察報告例は多い。しかし同種での雄同士の連結行動の観察報告例は少なく、余り見当たらない。今回、雄同士の連結行動を2例程観察したので、見にくい写真だが添えて報告しておきたい。

1. オジロサナエ *Stylogomphus suzukii* (OGUMA)

1996年8月15日、埼玉県寄居町三品の川(5439-1104)で、午後3時過ぎ川筋には日が陰り見にくいのが、飛来してきた本種の♂が縄張り中の♂に捕まり、すぐに連結状態になる。絡んで水の流れの傍に落下し、すぐにリング状になるが、飛び上がろうとはせず、そのままの状態であった。近寄って写真を一度押したが、すぐにリング状態は解かれ、雄同士は別々の方向に飛び去った。何故こうなったか、この時間帯は本種の産卵場所は日が陰り、しかも突然飛来してきたので、雄雌の判別なく連結に挑んだのではないかと推察される。

2. クロスジギンヤンマ *Anax nigrofasciatus nigrofasciatus* OGUMA

1997年6月29日午前11時頃、埼玉県秩父市栢谷の池(5439-0130)で、本種の♂がテリトリーを張っている領域に、新しい♂が入ってきて、縄張り中の♂が絡んで連結状態になる。池の上空を連結状態で飛び廻り、時々交尾態に移行しようとするが旨く行かず、数分で高い杉の梢に止まる。しかし、その後も連結状態で飛びだし、交尾をしようと無駄な行為を繰り返し試みるが、段々と下降し、やがては地上近くの笹の茎に掴まる。遠くからシャッターを押したが、辛うじて種別が分かる程度の写真だった。その後、連結を解いてしまった。

以上2例程、雄同士の連結態を観察したが、オジロサナエの場合、一時的ではあったが、物理的に考えられないリング状になり、どうしてそのような事が起きたのか不可解である。

参考文献

1. 加納一信、1987：カワトンボ雄同士の連結 月刊むし 193：43
2. 佐藤良次、1988：カラカネトンボ雄同士の連結 越佐昆虫同好会会報 65：52



写真1. 雄同士リング状になつたオジロサナエ



図. 写真1のイラスト

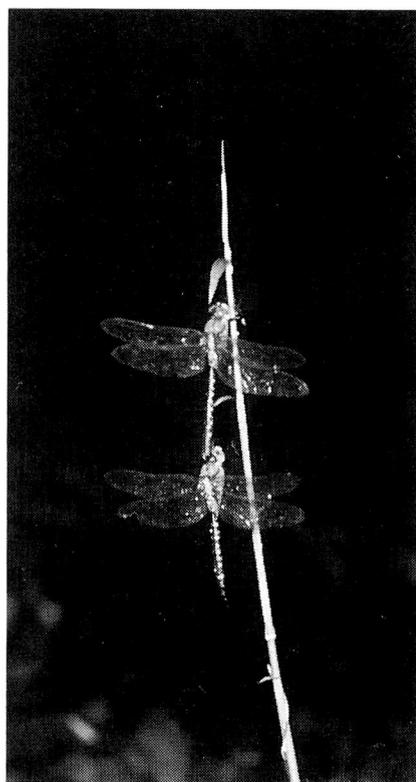


写真2. 雄同士の連結態で止まるクロスジギンヤンマ

コシボソヤンマ♀の産卵中の惨事

加納 一信

埼玉県ではコシボソヤンマ *Boyeria maclachlani* (Selys) の生息地は近年の開発によってご多分にもれずその生息状況は悪化の一途をたどり、ごく限られた地域でしか見られなくなった。そういう中で、埼玉県寄居町三品川では個体数は少ないが7月から9月まで川筋で産卵個体がまだ観察される。同地で数回観察した産卵中に思わぬ惨事を目撃したので、写真を添えて報告する。

この地は外秩父山地の東に位置する低山地の上部丘陵 (150~200m) で、今まで本種の生息環境とは多少違い、オジロサナエ、ヒメサナエなど溪流のトンボが見られるような山間部の細い流である。しかもここでは沢蟹が多く見られ、山間部の溪流の特徴を持っている。この地点から1kmぐらい下流で♂のパトロール飛翔を観察し、本種の♂との出会いや交尾行動がおこなわれているようで、産卵場所は上流部まで範囲を拡げている。

1996年8月18日、三品川の上流部の溪流を歩いている時、羽音がするので辺りを見ると、石垣で護岸された所の水際でコシボソヤンマがしがみ付いていた (写真)。良く見ると石垣の下の隙間に朽ち木あり、歩いたとき波立て、そこで産卵中の本種♀が水にさらわれてしまった。何とかして這い上がり飛び上がろうと体勢を整えようとしていた。♀は完全に羽を水から離すことはできず、約2分ぐらい羽を動かすのみであった。しかし突然、引き込まれるように水中に潜ってしまい、石垣の下に消えてしまった。

何が起きたのかわからず、いずれ上がってくるのではと暫くその成り行きを見守った。しかし一向に上がってこない。手を石垣の下に入れて、水中を消えた個体を探したが、全く手がかりはなかった。水中に引き込んだのは何者なのか、暫くたたずんであたりを見渡したが、見られるのは沢蟹ぐらいである。

少し離れた所で水中に、白い沢蟹の脱皮殻がおお向けに沈んでいた。しかも甲羅の大きさは4cm程の大きなものである。後日、カトリヤンマが産卵中に沢蟹に捕食された例を聞いて、どうも沢蟹が怪しい。

○ 参考文献

碓井徹 他、1998. 埼玉県昆虫誌 1: 21-51.



写真：何者かに水中に引き込められるコシボソヤンマ♀

カビ類による変わった場所でのオジロサナエの死骸

加納 一信

1995年8月27日午後1時過ぎ、埼玉県寄居町三品川でオジロサナエを探しに川筋を歩いた。この溪流は本種の観察には手頃な場所で過去数年にわたって多くの生態を観察してきた所である。この日は暑く、涼を求めて木陰に入って腰をかけた所で、目の前のクサギ（臭木）の葉上で白いカビが繁殖したトンボの死骸を見つける（写真）。

枝に取り付きながら死んでいる冬虫夏草はよく知られているが、葉上でカビ等による死骸は見たことがなかった。トンボの死に方には色々あるが、最終的に死体は分解者であるバクテリアやカビ等によって土に戻るが、目にする機会のはめったにない。それに地上などでは掃除屋である蟻などの昆虫や分解者などの微生物によってすばやく消されてしまう。今回、葉上であったためカビ類に冒された死骸がそのまま残っていたと思われる。

風の通りの悪い川辺りではあったが、白い菌糸で覆われた死骸を見ると、それなりの時間が経過したと思われるのに、下に落ちずにこのような状態で残っているのが不思議であった。菌がコロニー状になって盛り上がり、部分的に見える個体の複眼、腹部、尾端からオジロサナエ *Stylogomphus suzukii* (Oguma) の♂と判別できる。死骸を見ている内に翅はまだきれいだし、外傷による死とは考えられず、どのようにしてこのようなになったのか。菌が休止あるいは縄張り中のトンボに、つまり生きている時に冒すのか、それとも死んで具合よく葉上に落ちた死体に取り付いたのか、はっきりさせる手がかりはなにも見つからない。

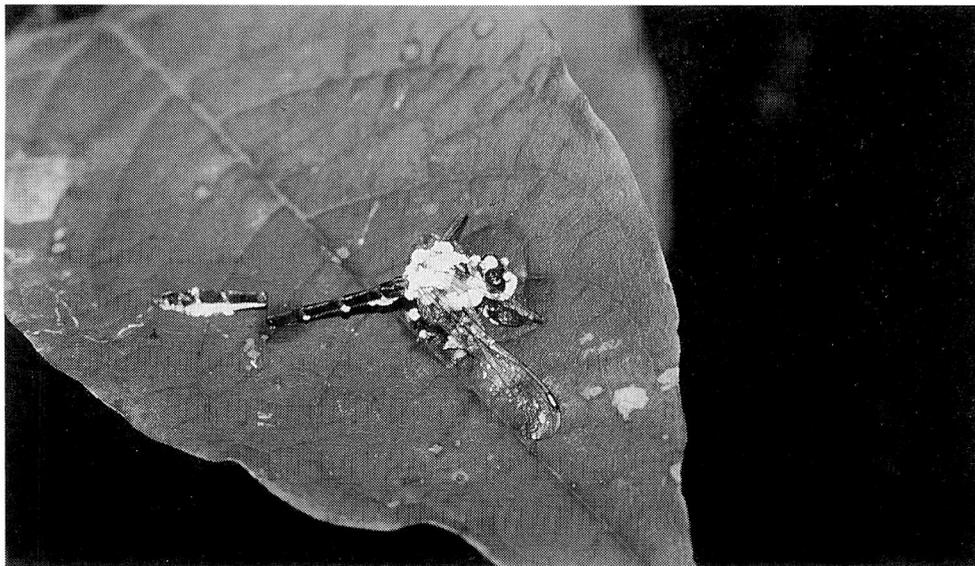
カビによるセミ類の大量死の報告があり（大林, 2000；碓井・東川, 2000）、これは流行病が原因であるが、トンボについても同様なことがあるのか気になる所である。

末筆ながら、文献でお世話になった碓井徹氏に厚くお礼を申し上げる。

注）クサギ：*Clerodendron trichotomum*

○ 参考文献

1. 大林隆司、2000. 糸状菌によるエゾハルゼミ成虫の大量死について. CICADA(日本セミの会) VOL.15, No.3 : 57-59
2. 碓井徹・東川修、2000. カビ類によるとみられるエゾハルゼミの奇異な死骸について. CICADA (日本セミの会) VOL.15, No.3 : 59-60



写真：葉上でカビに冒されたオジロサナエ♂の死骸

昆虫誌プラス (7)

埼玉昆虫談話会

当会は、1999年に、埼玉県産昆虫9,360種をリストした『埼玉県昆虫誌』別巻を刊行した。

本報文は、別巻刊行後に明らかになった埼玉県初記録種を含む報文を中心に、学名・和名の変更、種の削除などを適宜まとめて紹介するものである。まとめ方や閲覧文献などの詳細については、本報文の連載初回である『寄せ蛾記』93号p.2803を参照されたい。

【埼玉県初記録種】

HETEROPTERA 異翅目

- ◆ 野澤 雅美・松本 克臣 (2000) 寄せ蛾記 (99): 3026.

Pentatomidae カメムシ科

Asopinae クチブトカメムシ亜科

Andrallus spinidens (FABRICIUS, 1787) シロヘリクチブトカメムシ

COLEOPTERA 鞘翅目

- ◆ 豊田 浩二 (2000) 寄せ蛾記 (99): 3035-3038.

Carabidae オサムシ科

Synuchus silvester (HABU, 1955) ナガクロツヤヒラタゴミムシ

【昆虫誌プラスへの訂正など】

DIPTERA 双翅目

BRACHYCERA 短角亜目

- ◆ Akira NAGATOMI, Nagahisa TAMAKI, and Neal L. EVENHUIS (2000) South Paacific Study, 21(1): 15-18.

Bombyliidae ツリアブ科

『埼玉県昆虫誌』別巻のリスト中、Systropodinae の4種目の *Systropus* sp. c は、下記の通り新種として記載された。

Systropus liuae NAGATOMI, TAMAKI and EVENHUIS, 2000

タイワンハラボソツリアブ

△ この報文は、本種の命名者の一人でもある玉木長寿氏よりご教示いただいた。タイプ標本の一部は、埼玉県内の数力所から得られたもの。sp. c は1種としてすでに双翅目の種数に含まれていたため、本県産双翅類の種数に変更はない。

表 埼玉県産昆虫 目ごとの科・種数 最新情報

2000.12.12

		埼玉県昆虫誌 別巻 (1999)		前回までの 変更の合計		今回まとめ た変更の計		最新の科数 と種数	
目	名	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数
COLLEMBOLA	トビムシ目	9科	38種			+1種		9科	39種
PROTURA	カマシ目	4科	26種					4科	26種
DIPLURA	コムシ目	3科	4種					3科	4種
MICROCORYPHIA	イシノミ目	1科	1種					1科	1種
THYSANURA	シミ目	1科	1種					1科	1種
EPHEMEROPTERA	カゲロウ目	10科	72種					10科	72種
ODONATA	トンボ目	11科	90種					11科	90種
PLECOPTERA	カワゲラ目	9科	51種					9科	51種
BLATTARIA	ゴキブリ目	2科	4種					2科	4種
MANTODEA	カマキリ目	1科	5種					1科	5種
ISOPTERA	シロアリ目	1科	1種					1科	1種
ORTHOPTERA	直翅目	12科	121種			+1種		12科	122種
PHASMIDA	ナナフシ目	1科	5種					1科	5種
DERMAPTERA	ハサミムシ目	4科	13種					4科	13種
GRYLLOBLATTODEA	カマシ目	1科	4種					1科	4種
PSOCOPTERA	チャタテムシ目	1科	1種					1科	1種
MALLOPHAGA	ハジラミ目	1科	1種					1科	1種
ANOPLURA	シラミ目	5科	10種					5科	10種
THYSANOPTERA	アザミウマ目	2科	13種					2科	13種
HETEROPTERA	異翅目	38科	362種				+1種	38科	363種
HOMOPTERA	同翅目	36科	619種			+3種		36科	622種
AUCHENORRHYNCHA	頸吻亜目	(17科)	(367種)			(+2種)		(17科)	(369種)
STENORRHYNCHA	腹吻亜目	(19科)	(252種)			(+1種)		(19科)	(253種)
MEGALOPTERA	ヒトシロ目	2科	5種					2科	5種
RAPHIDIOPTERA	ラクダムシ目	2科	2種					2科	2種
NEUROPTERA	アミメカクシ目	10科	46種			+3種		10科	49種
COLEOPTERA	鞘翅目	107科	2826種	+1科	+123種		+1種	108科	2950種
STREPSIPTERA	シシトビ目	3科	13種					3科	13種
HYMENOPTERA	膜翅目	51科	1069種	+1科	+57種			52科	1126種
MECOPTERA	シリアムシ目	2科	18種			+1種		2科	19種
SIPHONAPTERA	ノミ目	8科	30種					8科	30種
DIPTERA	双翅目	87科	1490種			+6種		87科	1496種
TRICOPTERA	トビケラ目	19科	83種					19科	83種
LEPIDOPTERA	鱗翅目	57科	2336種			+11種		57科	2347種
	蝶類	(5科)	(135種)			(+1種)		(5科)	(136種)
	蛾類	(52科)	(2201種)			(+10種)		(52科)	(2211種)

32目 501科 9,360種 (+2科+206種) +2種 503科 9,568種
 (埼玉県昆虫誌 別巻刊行時) (前号までの計) (本号での計) (本誌 刊行時)

寄せ蛾記 99号 目次

小野寺 博昭：与那国島・蝶採集(しない?)日記	3007-3010
牧 林 功：生きものの美しさ、数の多さ	3011-3018
河野 恭一郎：U字溝の不思議：不思議なU字溝	3019-3023
萩 原 昇：彩湖(戸田市道満)でキマダラセセリの成虫を11月に採集	3024
野澤 雅美：埼玉県産半翅類雑記(17)	3025
野澤 雅美・松本 克臣： 県内各地でシロヘリクチプトカメムシ(異翅目 カメムシ科)を記録	3026
鷺尾 洋一：多摩湖(村山貯水池)でのクロコノマチヨウの記録	3027
巢 瀬 司：妙法ヶ岳のヘリグロチャバネセセリ	3028
巢 瀬 司：浦和市でアサギマダラを目撃	3028
巢 瀬 司：浦和市でのヒオドシチョウの記録	3029
豊田 浩二：大滝村で採集した蝶類2種	3029
阿 部 功：セイヨウミツバチがアシタバの黄汁を食べる	3030
豊田 浩二：外秩父山地におけるエゾハサミムシの記録	3031
豊田 浩二：ホソアカガネオサムシ採集奮闘記	3032-3034
豊田 浩二：クビアカトラカミキリの比企丘陵における記録	3034
豊田 浩二：埼玉県産ヒラタゴミムシ族の知見(1)	3035-3037
豊田 浩二：シバオサゾウムシを嵐山町で確認	3038
豊田 浩二：埼玉県の甲虫類に関する覚書(その2)	3038-3039
石塚 正彦：名栗村、荒川村、両神村でメスアカミドリシジミを採集	3040
石塚 正彦：ミヤマチャバネセセリの幼虫を採集	3041-3043
喜多 英人：秩父市定峰でクジャクチョウを目撃	3041
石塚 正彦：念願叶う alt 1800mのクロツバメシジミ	3044-3045
石塚 正彦：12月10日のクロツバメシジミ	3046
石塚 正彦：クロツバメシジミの吸水	3046-3047
菊川 和男・牧林 功：ムラサキツバメを岩槻市で発見	3048-3049
中川 利勝：埼玉県産蝶類記録(8)	3050-3052
加納 一信：蜻蛉の雄同士の間接行動	3053-3054
加納 一信：コシボソヤンマ♀の産卵中の惨事	3055
加納 一信：カビ類による変わった場所でのオジロサナエの死骸	3056
埼玉昆虫談話会：昆虫誌プラス(7)	3057-3058
会報・編集後記	3057